城戸賞　応募作品

圓を彫った男

竹本　信彦

【人　物】

加勢夏雄（三四―四〇）彫金師
中岡左京（三五―四一）元貨幣作り職人
エリー・ガウド（二六―三二）ガウドの妹
益木太一（二八―三四）彫金師
ウイリアム・ガウド（三〇―三七）冶金技師
トーマス・サンドル（五五―五九）
造幣寮首長
夏木トヨ（二三）中岡の妹
久世治作（四三―四九）造幣寮職員
井上馨（三三―三九）造幣寮頭
大隈重信（三一―三七）大蔵大臣
西旗譲（三三―三七）通弁士
ピーター・デニス（三二―三六）雇い技師
チェット・ニコル（二八―三二）お雇い技師
エイベル・チャールズ（四七）在日英国領事
ハウル・ナイス（三三）英国領事館職員
ハリー・バーク（三七―四二）英国公使
島津久春（二八―三二）薩摩藩　武士
トーマス・ウォルト（二七）英国建築家
俵徳平（二六―三〇）彫金師
工藤寛治（三一―三五）造幣寮　職工
平沼次平（二九―三三）造幣寮　職工
浅香時男（三五―三九）造幣寮　職工
加勢はる（二〇）夏雄の妻
明治天皇（一七）
職工Ａ・Ｂ・Ｃ
鎮台Ａ・Ｂ
大工Ａ・Ｂ
英国紳士達
食堂の女
英国人演奏家
英国人Ａ

あらすじ

ご公儀御用達の彫金師、加勢夏雄（三四）は御一新で江戸から武家が居なくなり代金の回収ができず、生活に困窮していた。

そこへ、明治政府から新しい貨幣『圓』の極印作りの依頼が来る。その頃の日本は財政難で苦しむ藩が作った贋金（にせがね）が大量に出回り、貨幣に信用がおけないことから新しい貨幣を作るよう外国から迫られていた。

加勢は自分の仕事がなくなったのは政府のせいだと断ろうとするが、自分の彫金を西洋に認めさせたい気持ちから依頼を引き受けて、大阪の造幣寮に出仕する。

加勢達がそこで目にしたものは蒸気機関をはじめとする西洋の機械。技術の差に愕然とする。その上、首長のサンドル（五五）や技術指導をするお雇い英国人達から未開野蛮人と見下される。日本人職工は鋳造技術の指導を受けられるものの、円形に図柄を刻印し貨幣に仕上げる圧印は教えてもらえない。貨幣作りは英国人の手に握られる。

そんな中、英国人と日本人職工との間でトラブルが続く。サンドル達は職工殺しの裁判にかけられるが治外法権により無罪となる。

納得できない職工達は貨幣鋳造を止め、英国人追放運動を起こす。しかし、お雇い英国人達はオリエンタル銀行の雇用であるため解雇できない。しかも、再度、追放運動を起こしたら逆に日本人を全て解雇して外国人だけで貨幣を作るとサンドルが通告する。それでも職工達は対抗して全面闘争の構えを見せる。

このままでは日本は世界から見放され、貨幣が作れなければ日本は経済破綻となる。

加勢は相談を受ける。圧印の技術を手に入れ、お雇い外国人を追放する方法はないかと。職工達と同様、サンドル達に憎しみを持つ加勢であったが、このままではいけないと思い、私情を殺し、サンドルに頭を下げて日本人の雇用を守るよう懇願する。そして、強かに造幣技術取得と外国人追放作戦を実行する。

○大英博物館・正面入口・表
　T―『明治九年　大英博物館』
　ギリシャ神殿に似た入口。
　英国紳士の身なりをしたウィリアム・
　ガウド（三七）が入っていく。

○同・中
　古代神殿の石像や石仏の展示物が並ぶ。
　ガウドはその展示物に見向きもせず、
　まっすぐ歩き、その先の一室に向かう。
　『（英語）館長室』の扉を開ける。

○同・館長室・中
　ガウド、静かに入ってくる。
　日本の土偶や埴輪が机の上に並べられ
　ている。錦絵や浮世絵もある。
　館長（六二）が赤い袱紗から一枚の銀
　貨を取り出してルーペで見る。
　表に龍、裏面に朝日の彫刻の一圓銀貨。
　＊以後、会話は英語。
ガウド「いかがですか、館長」
館長「君の収集品はどれも素晴らしい。おぉ、
　この銀貨は特に素晴らしい。しかしこれは」
ガウド「日本の銀貨です」
館長「（笑）冗談はいかんよ。ガウド君」
ガウド「しかも日本人だけで作りました」
館長「（笑い）君は愉快な男だ。では、この
　彫刻は冶金技師の君が教えたんだね」
ガウド「ご冗談を。龍を御覧下さい。今にも
　コインから飛び出しそうな龍です。そんな
　彫刻を彫れる英国技師はいません」
　館長、土器や浮世絵を指さし、
館長「粘土の器に遠近法のない絵。これが私
　の知っている日本だ」
ガウド「それは一部です。確かに日本の貨幣
　鋳造は大英帝国の技術抜きに成しえません
　でしたが」
館長「アメイジングだ。君の話は」
　と、一圓銀貨を高く掲げて見る。

○土佐堀川を遡上する和船
　T－『明治二年　大阪』
　竹竿が川底を突き和船が川面を進む。
川岸に米蔵が並び、和船が行き交う堂島辺りを天満に向かって進む和船。
ガウド（三〇）とエリー・ガウド（二六）が乗っている。
ガウド、望遠鏡で川岸を行き交う人々を見ている。
　＊以後、会話は英語。
ガウド「最高。この異国情緒」
エリー「気分悪いんだけど」
ガウド「エリー。何が嫌なんだ？」
　エリー、船頭（五五）の丁髷を見る。
エリー「頭に何か載ってる」
　ガウド、望遠鏡で川岸を歩く男を見て、
ガウド「確かに。男はみんな載せているな」
エリー「黒いクッキー？」
ガウド「は？　頭におやつを載せているのか」
エリー「私がお兄様に訊いているのよ」
ガウド「あれは望遠鏡か鉄砲だ」
エリー「ワォ」
　ガウド、英語で『野蛮人研究』と書いたノートを捲り、『好戦的』と書く。
エリー「キャー」
　と、両手で顔を覆う。
川岸で俵を持つ男の褌姿。尻が丸見え。
　ガウド、微笑む。
エリー「こんな気持ち悪い国って知ってたの」
ガウド「言わなかったか？」
エリー「言わなかった」
ガウド「言ったら、ついてこなかった？」
エリー「……」
ガウド「母上が決めた退屈な男と結婚させられるよりましだろ。噛みつくな」
エリー「二回も結婚に失敗した嫌がらせ？」
ガウド「噛みつくなと言っただろ」
エリー「お兄様が一番野蛮人だわ」
　ガウド、望遠鏡を覗いている。

○武家屋敷・正面門扉の前
　T―『東京』
　門扉を激しく叩く手。
　益木太一（二八）が門扉を叩いている。
　傍にいる加勢夏雄（三四）が止める。
　二人とも和服姿で丁髷をしている。
加勢「太一、もういい。帰るぞ」
益木「先生。ここが最後のお武家様だっせ」
加勢「いくら門扉叩いても、お化けすら出てこねぇんだ」
益木「そやかて一文も集金できんかったら―」
加勢「心配すな。なんとかなる」
益木「その『なんとかなる』だすけど、もうわての親も銭貸してくれへんのだす」
加勢「はぁ！」
益木「そうだっしゃろ」
加勢「ばか。俺は別に。お前の親に銭を借りてんじゃねぇ。銭を預かってんだよ。そのうち大きな利子つけて返す」
益木『『返す』だすか―」
　二〇人の官軍が縦列を組んで行進する。
加勢「みんなあいつ等のせいだ」
　と、官軍と反対方向に歩く。
　益木、加勢のあとをついて歩く。

○加勢の家・表
　長屋の一室。『加勢彫金』の看板。

○同・中
　板間の殺風景な部屋。
　神棚に柏手を打って願掛けをする益木。
益木「どうかお武家様が戻ってきますように」
　加勢、猪口で酒を飲み始める。
益木「あぁ、先生。その酒は売るんだす」
加勢「うるさい。俺が買ってきた酒だ」
益木「わての親の金で買うた酒だす」
　酒瓶を奪い合う二人。
益木「亡くなったおかみさんも言うてます」
　台の上に、はるの位牌がある。
加勢「はるの事を口にするんじゃねぇ」

益木「あぁ、先生。なら、わてが―」
　お互い瓶口を奪おうと競い合う。
加勢「止めた。疲れた」
益木「おおきに。これ売って米買うてきます」
加勢「米はいい。仕事だ」
益木「えぇ！　仕事おますのんか？」
加勢「鑿（タガネ）の磨ぎ方教えてやる」
益木「へぇ。おおきに」
　益木、きれいに並べて置いてある鑿の内の一本を取ってやすりで研ぎ始める。
加勢「おぉ。姿勢がいいね。俺ら金工は義理と腕を欠いたら終わり。仕事が無くて、どんだけ苦しい時でも腕だけは磨くんだ」
益木「へぇ。せやけど、先生、銭は―」
加勢「銭を追うな。技を追え」
　と、益木に隠れて酒瓶に手を伸ばす。
益木「へぇ。あ、先生！」
　と、酒瓶を再び加勢と奪い合いになる。
久世の声「失礼いたす」
　久世治作（四三）、大隈重信（三一）、井上馨（三三）が入ってくる。
　久世は髷に和服、大隈と井上は背広姿。
久世「加勢夏雄殿でござるか？」
加勢「そうだ。誰だ、お前」
久世「無礼であった。某は久世治作と申す」
大隈「大隈重信です」
井上「井上馨です」
益木「大隈、井上言うたら政府の偉いさん」
久世「今日は加勢殿に仕事の依頼で参った」
加勢「仕事？」
益木「まいどおおきに。贔屓いただきまして」
久世「加勢殿。貨幣を作って下さらぬか」
加勢「貨幣って銭のことかい？」
久世「さよう」
加勢「ふん。新しい政府は銭を持ってないと聞いた。仕事は受けられねぇな」
益木「えぇ！？　先生言うてはることが―」
久世「銭ならある」
　と、太政官札の束を出す。
益木「先生、引き受けまひょ！」

加勢「いつからこんな紙切れが銭なんだぃ」
久世「両替商にもっていけば銭と交換できる」
加勢「へっ。臍が茶を沸かすぜ。元貨幣司知事の左京に頼んだらどうだ？　それとも建前上、あいつの流刑を取り消しできないか」
久世「左京殿はすでに流刑を解かれているが、どこにおるものやら。加勢殿は左京殿と懇意にしていると聞いたが」
加勢「こっちはそれどころじゃねぇや」
久世「実は金座では作れない銭でござる」
と、メキシコ一ドル銀貨数枚を見せる。
加勢と益木、身を乗り出して見る。
益木「これが西洋の銭？」
大隈、長方形の一分銀を数枚出す。
大隈「これは貨幣司で作った一分銀です。形も揃っている。東洋ではメキシコ銀貨でないと貿易ができない。日本が世界に出ていくにはこれに負けない銭が必要です。此度、大阪に造幣寮を造ります。井上が造幣頭、久世が参事と貨幣分析所長を仕った。『両』の呼び名も一新します。子供でもわかるように」
と、親指と人差し指で丸を作り、
大隈『『エン』と改名します」
加勢「そのままかい。確かに金座では無理だ。かて、一個一個彫るのに金工が何人いる？」
久世「彫るのでない。円形に極印の図柄を圧力かけて刻印するのでござる」
加勢「圧力かけるって。金槌で叩くんだろ」
久世「人の力はいらん。西洋の機械で圧力をかけて作る。しかし、極印作りに優秀な金工が必要。それを加勢殿にお頼み申したい」
加勢「ちゃんちゃらおかしいぜ。あんたらの御一新のお陰でご公儀の仕事がなくなったんだ。政府の仕事を受ける義理はないね」
井上「なんだと無礼者！」
久世、井上を制止する。
久世「先刻、御上の御太刀金物彫刻を断られたと聞いた」

○（回想）江戸城・畳の間
侍従、黄金に輝く太刀を胡坐で座る加勢に差し向ける。
加勢「断る」
益木の声「えぇ！　御上のお仕事を」

○元の加勢の家・中
久世「誠にあっぱれなご公儀への忠義。日用金物彫刻の道もあろうに廃業を覚悟の上か」
加勢「……」
久世「御上はひどく怒った侍従をなだめられ、加勢の彫金は日本一、いや世界一と仰った」

○（回想）江戸城・玉座の間
玉座に座る明治天皇（一七）の背中。
その向こうに天皇の言葉を土下座して聞いている侍従と久世の姿がある。
明治天皇「本当に優れたものは形を変えてでも末の世に残っていく力がある。それを時勢の力で絶やしてはならぬ。世の中の西洋化はやむを得ずとも貨幣に刻まれる私の象徴は日本の彫金、加勢に給うものなり」

○元の加勢の家・中
久世「と仰せられた。日本の彫金の未来を憂う御上の御心にこたえてくれぬか」
加勢「……」
益木「そこまで……」
久世「但し、採用は未定。エゲレスのオリエンタルバンクが銭の図柄を考えておる」
益木「日本の銭を作るんだっしゃろ。日本が決めることやないのだすか」
井上「日本の技術など西洋に比べ子供だまし。今般閉鎖した香港造幣局の機械をエゲレスから購入し、貨幣鋳造条約をオリエンタルバンクと結んだところだ」
久世「せめて我々は西洋に負けない図柄を作り、エゲレス人を感服させたいのでござる」
井上「エゲレスの技法を学ぶ機会を与えるぞ」
加勢「俺も安く見られたもんだ」

久世「二〇ほどの図柄と円形を用意した。
　表に龍、裏に朝日の図柄を彫ってほしい」
　と、貨幣図案の和紙を広げ円形を出す。
加勢「他人様の描いた図柄は彫らないよ」
久世「……」
加勢「一枚だけ。俺の図柄を彫らせてもらう」
　久世と大隈と井上、互いに顔を見る。
益木「以一当千。先生はいつもお武家様の顔
　色を伺ってあれこれ彫るんやのうて、自分
　で考え抜いたもんを一つ彫るんだす。作る
　のは一つだすが、千の品に値する代物だす」
　大隈、頷く。
　久世、広げた和紙を束ねる。
久世「では。お頼み申す」
　と、大隈と井上と一緒に家を出ていく。
加勢、片手に太政官札の束、もう片手
にメキシコ一ドル銀貨を手に取る。
益木に太政官札を渡して机に向かう。
益木「先生。全部はあきまへん」
加勢「構わん。それ持って大阪の親元に帰れ」
　加勢、机の前で正座をする。
益木「……」
　加勢、机に一ドル銀貨を置く。
　腕まくりをして、筆を取る。
益木「わては銭勘定で去ったりしまへん」
加勢「……」
　加勢、和紙に龍を描き始める。
昇り龍。尖った髭と爪。玉を銜えた龍。
×　×　×
加勢の周りに龍を描いた沢山の和紙。
×　×　×
暗い部屋に蝋燭の灯り。
金槌で鏨を叩く。
円形に龍の胴の輪郭が彫られていく。
刃先の形の違う鏨に持ち替える。
強弱をつけて動く金槌の拍子。
×　×　×
燃える蝋燭は残り少なくなっている。
口を開けた龍が彫られていく。
×　×

朝日が部屋に差し込む。
加勢の手が鑿を置く。
横になって寝ている益木が目を覚ます。
加勢、円形の彫りを見据える。
口を開け、玉を爪で掴む龍の彫刻。
益木「天皇の象徴に相応しい彫りだす」
裏返すと朝日の彫刻。
益木「輝く朝日。これぞ日本だす」
加勢「西洋に勝負。大阪に行くぞ」
と、はるの位牌を見る。
×　×　×
（フラッシュ）
家の前。加勢はる（二〇）、笑顔で羽子板をする姿。
×　×　×
益木「おかみさんも一緒に大阪だすか」
加勢「俺が慕う女は後にも先にもはるだけだ」
立って、はるの位牌を懐にしまう。

○ある武家屋敷・塀の外
T―『大阪』
丁髷に着物姿の中岡左京（三五）、走ってきて辺りを見回す。手に持った石を武家屋敷の中に投げて走って去る。

○同・中
丁髷の男達が銀を金槌で叩くなど古来の方法で貨幣鋳造をしているところへ、障子を破って石が投げ込まれる。
一人の男、その石を手にとり、周りの男たちに見せる。石に赤色の〇がある。
男達、作業を止める。
素早く作りかけの銀貨を木箱に詰める。

○同・玄関の門扉・表
官軍二十人、待機している。
門の内側から官軍の一人が門扉を開けると、待機していた官軍が入っていく。

○同・中

官軍、座敷になだれ込むが誰もいない。
官軍二人が逃げ遅れた男を「捕えました」と、指揮官の前に突き出す。
指揮官「お前は元貨幣司の。どういうことだ」
と、男の襟首をつかむ。

○造幣寮の対岸
中岡と木箱を担いだ職工達が息を切らせて走って来る。立ち止まり、休む。
対岸に建設中の造幣寮が見える。

○造幣寮・建築現場
T―『大阪　造幣寮　建築現場』
西洋風の工場を建設中。
大隈と井上とトーマス・ウォルト（二七）が図面を広げて見ている。
怒った顔のハリー・バーク（三七）と十人程の英国紳士が来て井上達を囲む。
＊以後、会話は英語。
井上「バーク公使。ご機嫌いかがですか？」
バークは井上と大隈を睨む。
井上と大隈、たじろぐが虚勢をはる。
井上「ご覧下さい。工事は順調です」
バーク「（遮り）ウォルト。外したまえ」
ウォルト、図面を持って去る。
バーク「昨日、また我が国の商人が二分金、五〇枚の贋金を掴まされた」
井上「！　はぁぁ」
バーク「これ以上待てない。金への交換と贋金撲滅の明確な期限を示せ」
井上「その件は今、太政官と全力をつくして対応を検討中でございます」
バーク「元貨幣司の職工が財政難で苦しむ藩の贋金作りを手伝っていると情報が入った」
井上「承知しております」
バーク「政府主導という噂がある」
井上「決してそのようなことはございません」
バーク「信用しろと？」
井上「ええ」
バーク「どうやって信用しろと言うんだ！」

と、井上を強く押すと、尻もちをつく。
井上のポケットから二分金が落ちる。
その二分金を拾い上げるバーク。
バーク「お前たちの作った二分金ですら金の量は二割しか含まれていない。こんな三流国の悪銭を貨幣と呼ばんのだ！」
と、二分金を地面に落とし、靴で何度も踏みつける。
バーク「！」
二分金を拾いあげる。金メッキが剥がれて下の銀台が見えている。
井上・大隈「！」
バーク「これは？」
井上「贋金。いったいどこで？」
バーク「君が気づかずに使っていたとは」
と、二分金を井上の胸ポケットにいれ、
バーク「信用できる貨幣が君の国にはない」
と、去っていく。
取り囲んでいた英国紳士達も去る。
井上、ポケットの二分金を取り出す。
二分金を地面に投げつける。
大隈、唇をかみしめ、拳を握る。
×　×　×
夕方。人気のなくなった工事現場。
一つの建物から煙が昇り始める。
昇る煙が黒く大きく空を覆う。
×　×　×
夜。黒い煙が火事の明かりでわかる。
造幣寮内の建物が火柱を立てて燃える。
×　×　×
朝。焼け跡。炭になった木材。
焼け崩れた煉瓦壁。
呆然と見ている井上と大隈。
井上「鋳造機械までも。全てを失った」
大工が大八車や天秤棒に縄もっこで片づける中、エリーが焼け跡を歩く。
＊以後、会話は英語。
ガウド「エリー。危ない。そんな所を歩くな」
ガウドとウォルト、井上達の傍にくる。
ウォルト「元気だしましょう。井上さん、大

隈さん。未来を見たではありませんか」
井上「未来？」
　ウォルト、ポケットから貨幣を出す。
　加勢の作った見本貨幣。
ガウド「素晴らしい。誰が作ったのですか？」
井上「彫金師の加勢夏雄です」
ウォルト「これを作るんです！」
井上「すでに極印製造は貴国に発注しました」
ウォルト「君の眼は節穴かね？」
井上「はぁ？」
ウォルト「よく見たまえ。ソブリン金貨を超える彫刻だ。サンドル首長も珍しく褒めた」
井上「あのサンドル氏が―」
ガウド「貴方の国民はよく働き、礼儀正しい。再建も可能だ。君達が後ろ向きでどうする」
井上「そうですね」
ウォルト「香港造幣局にまだ柱や機械が残っています。全て購入すれば何とかなります」
大隈「いくらですか？」
ウォルト「英国政府は六万ドルで売ると」
大隈「六万ドル」
ウォルト「決断すべきです」
大隈「……　わかりました。買いましょう」
　ウォルトと大隈、握手をする。
エリーの声「キャー」
　エリーが足を挫いて座っている。
ガウド「問題はこっちだ」
　と、ウォルトとエリーの傍に向かう。
＊以下、会話は日本語。
大隈「早速、オリエンタルバンクに資金の調達に行ってくる」
井上「実は鎮台から妙なことを聞いた」
大隈「妙なこと？」
井上「火事の前に、建物内から物音がしたと」
大隈「付け火？」
井上「俺が思うに付け火はエゲレス人の仕業」
大隈「考え過ぎだ」
井上「（大声）考え過ぎではない！」
　ガウドとウォルトが振り向く。
大隈「落ち着け。エゲレス人が見ている」

井上「香港造幣局の機械を残らず買わされるのも、彼らの策略だ」
大隈「そんなことはわかっている」
井上「いったいオリエンタルバンクに幾らの借財があるんだ？」
大隈「すでに国家予算は超えた」
井上「その上にまた借りるのか」
大隈「西洋に通用する貨幣が一刻も必要だ」
井上「利息は？」
大隈「時による。平均で年一割二分だ」
井上「一割二分。普通七分～九分と聞いだぞ」
大隈「それは西洋の話だ。我が国はまだ信用がない。一割以下の利息で貸してくれる国や銀行など何処にもない」
井上「エゲレスの思うつぼだ」
大隈「今は歯を食いしばるしかない。資金繰りは俺。外交はお前だ」

×　×　×

工事現場の俯瞰。
焼け跡が片づけられる。
更地に新しい煉瓦が運ばれる。
笑顔で煉瓦を積む職人達。
汗を流しコンクリートを練る職人達。
ガウド、職人を見ている。
ガウド「（英語）私は誤解していたようだ」
と、ノートの表紙『野蛮人研究』に線を引き『日本民族研究』と英語で書く。

×　×　×

貨幣鋳造工場が出来ていく。

○造幣寮・貨幣鋳造所・正面（朝）
鎮台（守衛）と鉄柵で囲まれた敷地。
入口はギリシャ宮殿調の石柱がある。
加勢と益木、圧倒されて口を開ける。

○同・貨幣鋳造所・裏
鋳造所より高い煉瓦の煙突がそびえる。
加勢と益木、圧倒されている。
馬の蹄の音が近づいてくる。
振り向くと、二頭の馬が車両を引っ張

っている。馬車鉄道である。
車両にエリーが乗っている。
加勢達、車窓から外国人女性と気づく。
益木「ここ、どこだす？」
加勢「……」
益木「わて、なんか怖いだす」
加勢、煙突に駆け寄る。
煙突の鉄梯子を登る。
車両を降りたエリー、上る加勢を見る。
加勢、てっぺんまで登って一望する。
加勢「これが西洋！」
鋳造工場、宿舎、西洋館、馬車鉄道等。
五万六千坪の広大な敷地に造幣寮の姿。
西洋の近代的な一つの町になっている。
その外は木造の町並みが広がっている。

○天保山沖の海上
T―『明治四年』
英国旗がたなびく数隻の蒸気船の軍艦から空砲（祝砲）が何発も撃たれる。

○造幣寮・鎮台・表
鎮台に『造幣寮創業式』の看板が立つ。
和服姿の沢山の町人が入っていく。
久世の声「およそ世界で大きいものはエゲレスに太平洋。ロンドン博物館に日本の造幣寮。ここは世界で一番大きな造幣寮です」

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室
帽子を被った久世（四五）と加勢（三六）と益木（三〇）が入ってくる。
圧延機・圧搾機・圧縁機、圧印機などがそれぞれ列になって並んでいる。
加勢と益木、しげしげと機械を見る。
久世「これが西洋の機械でござる」
加勢「こんな鉄の塊どうやって動かすんだ？」
久世「上を見て下され。シャフトというあの鉄の軸が回転して、その回転がこれらの機械に伝わって動くからくりでござる」
加勢「棒はどうやって回すんだい？」

久世「蒸気でござる」
加勢「蒸気。あの黒船を動かす蒸気か」
益木「先生。わて、さっぱりわかりまへんわ」
加勢「俺もわかるかい」
　二階監視台に井上（三五）が姿を現す。
井上「ようやくわかったかね。我が国は西洋に比べ二百年以上遅れている」
　と、監視台から階段を下りてくる。
井上「君も自分の恰好を見てそう思わんか」
加勢「……」
井上「頭の髷。西洋人はそれを野蛮人と見る」
加勢「髷をバカにするな。髷は俺達の魂だ」
井上「西洋ではそんな髪型をしない」
加勢「それじゃ、西洋人の魂はなんだい？」
井上「久世殿。帽子をとりたまえ」
　久世、ためらいながら帽子を脱ぐ。
　断髪頭である。
加勢・益木「！」
井上「出仕の時は髷を落としてもらう予定だ」
加勢「魂を切り落としてまで出仕はできねぇ」
　と、去ろうとする。
久世「加勢殿！」
　立ち止まる加勢と益木。
久世「貴方が必要だ。髷のことは造幣首長のサンドル殿に相談いたす故、出仕を頼む」
加勢「……」
久世「それから今晩、創業祝いに某の作った花火を打ち上げ申す。普通の花火ではござらん。西洋にもない珍しい花火でござる。子細は見てのお楽しみ。どうか見て下され」
　加勢と益木、去っていく。
　久世と井上、加勢達の背中を見送る。

○桜の宮・造幣寮の対岸（夜）
　大川に提灯をぶら下げた船が浮かぶ。
　造幣寮は人込みで賑わっている。
　川岸で夜空を見上げる加勢と益木。
益木「花火見たら東京に帰りまひょ。わてらに髷落とせ言うんは、自分の親の頭叩け言うのと同じだす」

加勢、造幣寮を指さし、
加勢「あれを見ろ。日本人だけで作れん。井上殿の言っていることも一理ある」
益木「先生。何を弱気になってはるんだす」
加勢「俺たちは野蛮人か」
花火が打ち上げられる。
益木「あ、花火が始まりましたで」
花火が造幣寮の上空で花開く。
加勢「！」
益木「先生。見はりました？　花火に色ついとりましたで。赤いのんや。青いのんや」
また、花火があがって開く。
益木「ほれほれほれ。花火に色が。こんな花火、初めてだっせ」
加勢「凄いぞ」
益木「へぇ。凄いだす」

○造幣寮・泉布観・二階バルコニー（夜）
エリーや沢山の男女の西洋人が「ビューティフル」「ワンダフルカラー」
「西洋にない花火だわ」と感嘆する。
その真ん中で大きな態度で葉巻を吸うトーマス・サンドル（五五）、傍で西旗譲（三三）が灰皿を持っている。

○同・川岸
工藤寛治（三一）、平沼次平（二九）、浅香時男（三五）や職工が漆黒の空で花開く花火に指をさして「凄い花火や」と興奮して観ている。

○桜の宮・造幣寮の対岸（夜）
花火を見ている加勢と益木。
加勢「久世殿の意地だ。西洋に負けれん意地」
と、大笑いする。

○造幣寮・鎮台・表（朝）
髷と和服を着た四、五〇人の男（職工）が「どういうことや」と鎮台Ａ・Ｂに向かって騒いでいる。

丁髷をした加勢と益木がくる。
益木「えらい騒ぎだすな」
門扉に貼り紙がある。『丁髷禁止　断髪デナイ者ハ入寮ヲ禁ズ』とある。
馬に乗ったサンドル、西旗、ガウド（三二）が来る。一同、鎮まる。
西旗「鎮台。この騒ぎはなんだ？」
鎮台A「はい。この貼り紙を外せと」
西旗「（英語）丁髷禁止の貼り紙を外せと」
サンドル「（英語）バカか。西旗。説明しろ」
西旗「（英語）は、閣下。（男達に）よく聞け。この通達はこちらにおられるサンドル造幣首長の命令だ。断髪の上、出仕しろ」
丁髷頭の工藤が噛みつく。
工藤「殺生だっせ。髷は俺達鍛冶屋の誇りだす。切れるわけおまへん」
西旗「髷を恥と思え」
工藤「通弁さん！　恥とはどういうことや！」
「どういうことや！」とヤジが飛ぶ。
サンドル、杖で鎮台Bに指図する。
鎮台B、門扉を開ける。
サンドル、馬に乗って門扉の外へ出る。
サンドル「（英語）文句のある奴は誰だ！」
と、杖で職工を一人ひとり指す。
サンドル「（英語）お前か！　お前か！」
一歩下がってしまう男達。

○同・西洋館・二階（朝）
エリー（二八）、窓からサンドルが杖で日本人を指しているのを見ている。

○同・貨幣鋳造所・鎮台・表（朝）
サンドル「（英語）腰抜けな野蛮人どもが」
サンドル、平沼を杖で指す。
サンドル「（英語）髷を落とせ！」
と、平沼の髷に杖を突きさす。
加勢「！」
平沼の頭、杖で振り回される。
唖然とする職工達。
加勢、職工達をかき分けて進む。

益木「先生！」
と、加勢を追いかける。
平沼、髷がほどけて、呆然とする。
してやったり顔のサンドル。
サンドルの杖を掴む男の手。加勢の手。
サンドル、加勢を睨む。睨み返す加勢。
西旗、慌てて馬から降りる。
西旗「離せ！　杖を離せ！」
益木「まっとくんなはれ」
と、西旗を制止しようとする。
西旗「なんだ貴様は！　どけ！」
益木「先生。その手、離しとくれやす！」
ガウド「（英語）首長。止めて下さい！」
加勢、杖から手を離す。
サンドル「（英語）名を名乗れ！」
西旗「サンドル閣下に名を名乗れ！」
加勢「彫金師の加勢夏雄だ」

○同・西洋館・二階（朝）
エリー、窓から加勢を見ている。

○同・鎮台・表（朝）
＊以後、会話は英語。
西旗「彫金師の加勢夏雄です」
サンドル「カセナツオ」
ガウド「（独白）カセナツオ！　この男が」
サンドル「カセ。お前を絶対許さない」
ガウド「首長。髷は私に預からせて下さい」
サンドル「では、即刻、髷を切らせろ」
ガウド「時間を下さい。ストライキを起こされると貨幣を作る者がいません」
サンドル「この男（加勢）だけでも切らせろ。逆らった詫びもだ。できなければクビだ」
ガウド「どちらもできません」
サンドル「命令だ！　従え！」
ガウド「彼が唯一の彫金師です」
サンドル「何！　……腐っている国だ」
と、馬で去っていく。
職工達が「やったー」と歓声をあげる。
サンドル、振り向き、唾を吐く。

ガウド「……」
益木と西旗、一息つく。
職工達、加勢に「さすが加勢はんや」
「おおきに加勢はん」と加勢を囲む。
ガウド、踵を返し去っていく。

○同・西洋館・二階（朝）
エリー、窓から囲まれる加勢を見て、
エリー「ワァオ。ヒィズ　ホット！」

○同・蒸気機関室
蒸気機関が動いている。
各種メーターが動いている。

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室
久世を先頭に五〇人の日本人職工が整列している。
柱に神棚があり、一斉に柏手を打つ。
久世「よし。操業はじめ」
と、レバーを押す。シャフトが動き、圧延機・圧搾機・圧縁機、圧印機が連動する。職工達、「おぉ」と感嘆する。

○同・同・極印製造室
奥の一室。作業台だけある。
加勢と益木と俵徳平（二六）と二人の職工が並ぶ。
加勢「加勢だ。ここで作る銭は日本人だけじゃない。外国人も手にする。俺達の彫った彫刻を見てなんと思うか。『素晴らしい彫刻だ』外国人にそう言わせる。俺達は野蛮人じゃない。証明しよう。一筋の彫りも失敗は許さんぞ。肝に命じて仕事してくれ」
一同「はい！」
各自、作業台の席につく。
貨幣の図面を広げ極印を台に固定する。

○同・溶鉱炉室
ガウドの指導のもと、職工が溶けた銀を鋳型に入れている。

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室
ピーター・デニス（三二）とチェット・ニコル（二八）達外国人技術者と日本人職工が対峙している。
杖を持ち椅子に座ったサンドルがいる。
その間で久世が西旗に言い寄っている。
久世「承服できない。日本人に技術を教えないとはどういう了見でござるか」
西旗「貨幣鋳造条約第四項外国人に報知なく貨幣の持ち出しせず又は鋳造すべからず」
久世「貴様。その一文のどこに日本人に技術を教えぬと書いてある」
サンドル、久世を杖で指す。
＊以後、会話は英語。
サンドル「こいつは何を言っている？」
久世「首長。日本人に技術を教えて下さい」
サンドル「英語を話せるのか」
久世「西洋の化学の本を読む為に取得致した」
サンドル「色のついた花火は見事だった。しかし、野蛮人に造幣技術を教える気はない」
久世「英国紳士とは名ばかりですか」
サンドル「紳士条約を結ぼう。お互い忠誠をもって仕事にあたる為に。私の事を首長ではなく『閣下』この者達を『ボス』と呼べ。そうすれば圧印以外の技術を教えてやろう」
久世「圧印は教えて下さらんのか」
サンドル「円形のままなら貨幣ではない。しかし、刻印をすると貨幣になる。圧印は重要かつ繊細さを要する難しい技術だ。言葉の通じぬ野蛮人に教えるのは今は無理だ」
＊以下、会話は日本語。
久世「馬鹿にしやがって」
工藤「久世はん。偉いさんは何て？」
久世「サンドル首長を『閣下』、技術者を『ボス』と呼べと言っておる」
工藤「閣下、ボス？　何様のつもりや」
久世「でないと鋳造を教えないと言っておる」
工藤「……　平沼はんの髷を杖で差した詫びが入るまで髷は譲られへんけど、銭作りは教わるんや。そこは折れたる」

久世「但し、我々に圧印を教える気はない」
工藤「わかった。新しい銭作りの為には一歩一歩や。久世はんの花火のように、いつか西洋に負けへん銭をわてらは作りたいんや」
久世「……」
　職工達、「そや。そや」と賛同する。
　工藤、サンドルの前に立ち一旦躊躇い、
工藤「サンドル閣下。お頼み申します」
と、一礼すると、他の職工も躊躇いながら「閣下お頼みします」と一礼する。
　サンドル、してやったりの笑顔をする。
　久世、唇を噛みしめる。
×　×
　英国人の指導のもと、職工が鋳棒を圧延機に通し板状に伸ばしている。
　職工は英国人に『ボス』と声をかける。
×　×
　英国人の指導のもと、職工が圧搾機に板を差し込むと円形がくり抜かれる。
×　×
　自動秤量機を通過していく円形。
×　×
　圧印機でデニスが円形を圧印する。
　一圓銀貨が出来てくる。
×　×
　俯瞰。機械を操作する職工達の姿や大きな音を立てて機械が動いている。

○同・造幣頭室
　井上、ハンガに吊るした燕尾服にブラシをかけながら久世と話す。
久世「サンドルを造幣首長から降して下さい」
井上「サンドルは香港造幣局の建造から携わった実績がある。彼無しでは我が国の貨幣作りは成り立たん」
久世「せめて横柄な態度を直すよう忠告を」
井上「彼は海軍の少佐あがりだ。直らん」
　久世、ブラシをかける井上の手を掴み、
久世「どうして我々は圧印がきないのですか」
井上「離したまえ」

久世、逆らえず手を離す。
井上、ブラシをかけた燕尾服を着る。
井上「西洋には西洋の交渉術というものがある。君達職人は黙って西洋人に従い、銭を作っておればよい。私は今から交渉の準備だ。出ていきたまえ」
久世「……」

○同・全景（夕）
夕焼けに造幣寮の町が染まる。
弦楽器の奏でるワルツが聞こえてくる。
長屋の職員宿舎から職工達が出て来る。
加勢と益木も出て来る。
加勢「なんの音だ？」

○同・泉布観・二階ホール（夕）
英国人演奏家が奏でる弦楽四重奏。
ワルツが演奏されている。
天井には豪華なガス灯シャンデリア。
その下で、ドレスを着た英国女性達と燕尾服を着た英国人技師達が優雅にダンスを踊っている。
サンドル、女性とご機嫌に踊っている。
井上、壁際でワインボトルを持ち笑顔で踊るサンドルを見て一息つく。
椅子に座る英国人にワインの酌をする。
島津久春（二九）、帯刀して丁髷に羽織袴姿で椅子に座っている。
井上「島津殿。西洋のワインをいかがかな？」
島津、不愛想に首を横に振る。
大隈（三三）が入ってくる。
井上、大隈に気付いて傍に寄る。
大隈「どうだ？」
井上「ご機嫌。西洋人にはダンスが一番だ」
と、サンドルを一瞥する。
サンドルはご機嫌に踊っている。

○同・同・庭（夕）
木に登って職工達がダンスを見ている。
木の上から加勢と益木も見ている。

益木「どういうことだす。男と女があんなにくっついて。しかも、部屋が明るいだっせ」
加勢「……」
益木「恥ずかしゅうて見とられしまへん。かと言うて目が離せまへんがな。わて、どないしたら。あ、おかみさんが踊ってはる」
と、さす指の先に見えるのは英国人と踊るエリーの姿。
加勢「はる？」
×　×　×
（フラッシュ）
羽子板の羽を追うはるの姿は踊りの様。
×　×　×
益木「おかみはんと、よう似とりますがな」
加勢、エリーの姿を目で追っている。
サンドルと西旗と島津がバルコニーに出て来て話し始める。
益木「あのエゲレス人でっせ。丁髷が嫌いなはずやのにお武家はんと。どういう事だす？　先生。聞こえとりまっか」
加勢、踊るエリーをじっと見ている。

○同・長屋職員宿舎・中（夜）
益木、布団で寝ている。
加勢、胡坐をかいて寡黙に座っている。
その前に、はるの位牌がある。
×　×　×
（フラッシュ）
羽子板の羽を追うはるの姿は踊りの様、
それが踊るエリーの姿に変わる。
×　×　×
加勢「俺は何を考えているんだ」

○同・鎮台・表
八尺の桜の木が一本。傍に座る加勢。
和紙を持ち桜の花をぼーっと見ている。
和紙に踊るエリーと、髪を結い和服を着たはる（二〇）の顔の墨画。似た顔。
ガウドとエリーが来る。
ガウド「ミスターカセ」

加勢「！」
エリーの姿を見て、慌てて和紙を畳む。
ガウド「今日は好いお休み」
加勢「あ。あぁ」
エリー、加勢に笑顔を向ける。
が、加勢は反射的に顔を背ける。
ガウド「私。誤解していました」
加勢「誤解？」
ガウド「日本人野蛮人でない。私、日本人興味。日本の神様興味。案内をして下さい」
加勢「案内？　俺、エゲレス語話せない」
ガウド「貴方の絵も見たい」
加勢「俺の絵？　あぁ、それなら」
と、手元の和紙の束をガウドに渡し、
エリーを一瞥。立って去る。
エリー「（英語）彼ってシャイ。面白いわ」
ガウド、和紙の束を広げると桜の蕾から開花までの水墨画の絵である。
ガウド「（英語）素晴らしい」

○同・貨幣鋳造所・極印製造室
極印を彫る加勢の額には汗がにじむ。
益木や他の職工が離れた所で見ている。
益木「いつもと様子が違うやろ」
頷く職工達。
加勢の前で両膝をつき見ているエリー。
エリー「ワォ。ス、バ、ラ、シ、イ」
汗を拭く加勢を益木達、笑っている。

○農道
益木、先頭を歩き、ガウドとエリーが横並び、その後ろを加勢が歩いている。
エリー、遅れて歩く加勢をチラ見する。
益木、加勢の傍に行き、並んで歩く。
益木「先生。めぐり合わせだっせ」
加勢「何が」
益木「言うてはりましたやん。俺が慕う女は後にも先にも、はる一人だけや」
加勢「それがどうした」
益木「エリーはんは生まれ変わりだっしゃろ」

加勢「ばか。はるは十年前に火事で死んだんだ。生まれ変わりなら、まだ子供だ」
益木「この際、おかみさんと思いまひょ」
加勢「髪の色、目の色も違うだろ」
益木「そうだっか。ほな。わてが」
と、ガウドとエリーの間に割って入る。
益木「エリーはん」
エリー「ハーイ。タイチ」
益木「今日見るんは、名将真田幸村の抜け穴」
エリー「メショウナダ？」
益木「ちゃいまんがな。名将―」
楽しく話す益木を羨ましく見る加勢。

○造幣寮・貨幣鋳造所・中央鋳造室
デニス、ヒビが入った円形が沢山入った箱を工藤に見せて、
デニス「（英語）割れたぞ。柔らかくしろ」
工藤「え？　ボス。どういうことでっか？」
×　×　×
ニコル、銀の円形と沢山の黒い円形を浅香に見せて叱る。
ニコル「（英語）見ろ。色が黒い。やり直せ」
浅香、ペコペコ頭を下げる。
離れた処でその光景を見ている久世。
×　×　×
圧印機。デニスが銀貨の圧印をする。
×　×　×
監視台。井上と大隈が圧印を見ている。
大隈「銀貨ばかり作りおって。我が国は金本位制だぞ。銀本位制ではない。どういうつもりだ。金貨の圧印をさせろ」
井上「値の落ちた銀がエゲレスに大量にある。日本がその銀を引き取っている状態だ。金貨はバーク公使が条約を盾に圧印させない」
大隈「くそっ」

○同・食堂（夕）
百人程が食事のできる食堂。
加勢と久世とガウドが話している。
久世「やはりエゲレス語がわからんと仔細な

技術の伝達が難しい」
加勢「ガウドさん。貴方に協力をして欲しい」
ガウド「学校作りましょうエゲレス語を学ぶ」

○同・『日進学社』・表
長屋の一室。表に『日進学社』の看板。
工藤や浅香、職工達が入っていく。

○同・同・中
ガウドが職工達に英語を教える。
黒板には『ハローグッバイ』など簡単な英語が書かれている。
職工達が「ハロー」等、復唱する。
黒板には『始め。止まれ』等々。
「スタート。ストップ」等、復唱する。
黒板には『金。銀』等々。
「ゴールド、シルバー」等、復唱する。

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室（朝）
ニコル、浅香に黒い円形を見せている。
浅香「イズ　ジス　ノット　グッド？」
ニコル「ザッツライト」
×　×　×
職工三人と久世が輪になって話す。
浅香「鋳棒を伸ばす回数を減らせへんか」
平沼「無理や」
浅香「塩水にいれたら黒なれへんとちゃうか」
久世「いや。もう一度熱した方がよかろう」
×　×　×
サンドルが杖を突きながら視察に来る。
その後ろを西旗がついてくる。
西旗「サンドル閣下のご視察だ」
職工達、直立不動で敬礼する。
サンドル「（英語）加勢達はどこだ？」
西旗「（英語）閣下と呼ぶのを拒んでいます」
サンドル、『極印製造室』の札を睨む。

○同・波止場
停泊した蒸気船から『ＧＯＬＤ』と書いた木箱を職工が目の前の倉庫に運ぶ。

○同・溶鉱炉室
職工が溶鉱炉に古い貨幣や砂金などを入れている。そばに空の木箱が山積み。

○同・金庫室
沢山の銭袋が積まれている。
職工、扉を閉め『金庫室』の錠をする。

○同・風呂場
洗い場と湯船があり、職工達が風呂に入ったり体を洗ったりしている。

○同・鎮台・表
八尺五寸の二本の桜の木がある。
春。鎮台達が七尺の桜を植える。
×　×　×
秋。桜の紅葉。大川を蒸気船が走る。
加勢（三八）が絵を描いている。
エリー（三〇）が来て、絵を覗き見る。
エリーの笑顔に加勢はぎこちない笑顔。
×　×
春。鎮台達が七尺の桜を植える。
×　×　×
紅葉桜。あさり採り船が大川を行く。
加勢（三九）とエリー（三一）、魚釣りをしている。
糸が引っ張られ、竿が大きくしなる。
加勢「きた。竿を引いて。プルアップ」
エリー、竿を引っ張る。
川面に釣れた大きな鯉が現れる。
加勢「プルアップ。プルアップ」
エリー「ヘルプ！　ヘルプ！　ナツオ」
加勢、竿に手を添える。
一緒に竿を握る加勢とエリー。
糸が切れて尻もちをつく二人。
鯉が泳いで去っていく。
二人、顔を見合わせて、大笑いをする。
離れた処でガウド（三五）が見ている。
×　×　×
T―『明治八年』

春。鎮台達が七尺の桜を植える。
加勢（四〇）、ガウド（三六）が来る。
加勢「話ってなんだい？」
ガウド「エリーのことです」
加勢「……」
ガウド「実はエリーには婚約者がいます」
加勢「―」
ガウド「すみません。エリーは結婚を先延ばしする為に日本に来ました。造幣寮での私の役目が終われば英国に連れて帰ると婚約者と約束してきました。加勢さん。今まで通り、エリーと友達でいて下さい」
加勢「……わかっている」
ガウド、去っていく。
加勢、桜の花を摘み、手で握り潰す。

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室
デニス（三六）、荷台を曳く浅香（三九）に、黒い円形を見せて怒鳴る。
デニス「ヘイ。モンキー。モンキー、カモン」
デニス「（英語）黒い。洗い直しだ」
浅香「（英語）ボス。言い直せ。私は猿じゃない」
デニス、浅香を睨む。

○同・同・極印製造室
益木（三四）達が極印を作っている。
加勢、それを見ている。
中央鋳造室から大きな金属音がする。

○同・同・中央鋳造室
円形を入れた箱が倒れて黒い円形が散らばっている。
デニスが馬乗りで浅香を殴っている。
極印製造室から加勢と益木が出て来る。
加勢「止めろ！」
と、デニスを制止に入る。
デニス、加勢を殴る。

○同・同・極印製造室

桶水で手ぬぐいを絞るエリー（三二）。
加勢、ぎこちなく見ている。
ガウドの声「エリーとは友達でいてくださいい」
エリー、手ぬぐいを加勢の顔に当てる。
加勢「構うな」
エリー「どうして？　顔、腫れとる」
加勢「大したことない」
エリー、ぶすっとする。

○同・食堂
二〇人ほどの職工達が食事をしている。
和服を着た女性三人が配膳をしている。
うどんの残り汁をすする加勢。
益木、加勢の殴られた痕を見ている。
益木「先生は英雄だす」
加勢「ばか。恥ずかしくて仕方ねぇや」
益木「なんでだす。誰もがぼうっと見てる中、先生は果敢にもあの大きなエゲレス人に立ち向こうて殴られたんだっせ。英雄だす」
加勢「わかってねぇな。いつもの俺ならあんなへなちょこ拳に当たるかい」
益木「そういうもんだすか」
加勢「そういうもんよ」
益木「わて、喧嘩したことおまへんから」
加勢「話にならんやっちゃな」
益木「へぇ。強がりいうもんが今一つ分かれへんのだす」
加勢「強がりじゃねぇ」
益木「どちらにしてもエゲレス人の態度は悪いだす。なんとかせなあきまへん」
加勢「そうよ。何かいい智慧があるのか」
益木「へ。先生がここを辞めると言うたらええんだす」
加勢「ばか」
益木「エゲレス人や太政官を困らせまひょ」
加勢「俺が姑息な真似する訳ねぇだろ」
益木「ちょっと脅すだけだす。先生！」
と、机を叩く。机の上の茶がこぼれる。
夏木トヨ（二三）、気づいて、来る。
益木「（トヨを見て）！」

トヨ「すんまへん。すぐ片づけますよって」
と、どんぶりを片付けだす。
益木「（独白）べっぴん……」
加勢「初めて見る顔だな」
トヨ「へぇ。新人だす。よろしゅうに。ほな」
トヨの去る姿をじっと見ている益木。

○同・長屋職員宿舎・中（夜）
ガス燈が灯る部屋。
壁に背を預けて腕を組む加勢。傍でエリーは加勢の腫れた顔を触ろうとする。
顔を背ける加勢。ぶすっとするエリー。
縁側で月を見ている益木。
エリー「太一も機嫌悪い？」
加勢「悪いどころか。恋煩い。恋をしている」
エリー「恋。（英語）恋に落ちたのね」
加勢「そうよ。恋っちゅうもんは痛いもんだ」
エリー「ナツオ。恋の痛さわかる？」
加勢「俺は。わからん」
エリー「そう」
壁際。背を向けたはるの位牌がある。

○同・食堂
木の葉丼を食べ終わる加勢と益木。
加勢が一気に茶を飲み干す。
茶を注いで回っているトヨに、
加勢「すまん。茶」
トヨ「へぇ。待っとくんなはれ」
益木「先生。あこぎだっせ」
と、加勢の湯呑を奪い、席を立つ。
湯のみを持ってトヨの傍に行く。
トヨ「すんまへん。回るのが遅うて」
益木「こっちが悪いんだす。呼びつけて」
トヨ、湯呑に茶を注ごうとする。が、
益木の左手に茶がかかってしまう。
益木「あちっ！」
湯呑を落とす。湯呑が割れる。
トヨ「あ！　すんまへん！　大丈夫だすか」
益木「（堪えて）大丈夫だす」
トヨ「手、出しとくんなはれ」

益木、左手を出すとトヨは益木の手を
自分の服の袖で拭く。
トヨ「こんなに赤うなって。早よ冷やさな」
益木「熱いのもええもんだすな」
トヨ「は？」
益木、うっとりしている。
トヨ「（笑い）へんなお人だす」
益木、割れた湯呑を拾いだす。
トヨ「止めとくれやす。ケガしますよって」
と、割れた湯呑を拾おうとする。
益木「あきまへん。あ、あ、あんさんが怪我」
トヨ「夏木トヨ言います」
益木「あ。トヨちゃん。トヨちゃんが怪我しますよって。わて、益木太一言います」
お互い、照れる。
加勢が笑顔で見ている。

○同・長屋職員宿舎・中（夜）
加勢と二〇人程の職工が集まっている。
工藤（三五）が立って話す。
工藤「我慢も限界や。あんな外国人は追放や」
平沼（三三）が立ち上がる。
平沼「替りの外国人を探してもらおうや。造幣頭の井上はんに直訴に行くしかない」
「そやそや」と拳が突き上がる。
加勢、腕を組んで見ている。

○同・鎮台・表（夜）
ガス燈の明かり。
益木が一人立っている。左手に包帯。
小走りで紙包みを持ってトヨがくる。
トヨ「太一はん。おまっとうさん」
益木「待ってへんで」
トヨ、紙包みを益木に渡す。
トヨ「これ。アロエだす」
益木「おおきに」
中岡の声「おい、トヨ！」
闇から足音が近づいてくる。
益木「誰や！」
と、トヨを守る体制をとる。

闇から中岡（四一）が現れる。
益木「あ、中岡はん！」
トヨ「お兄ちゃん！」
益木「えぇぇぇ。お兄ちゃん！？」
中岡「トヨが火傷負わせたらしいな。俺からも謝る。この通り許したってくれ」
益木「いやいや、中岡はん。謝らんでええんで。邪魔をせんとっていうか、トヨちゃんとどういう関係？」
中岡「正真正銘の兄妹」
トヨ「わてんとこ、貧乏だしたさかい。小さい時、わて、大阪の夏木家に養女に出されたんだす」
中岡「久しぶりに加勢に会いたくてな」
トヨ「ほな。わてはこれで」
と、踵を返して去っていく。
益木「え？　えぇっ！　トヨちゃん」
中岡「お前はこっちだろ」
と、益木を引き止める。

○同・長屋職員宿舎・玄関・表（夜）
加勢、職工の帰りを見送る。
加勢「ご苦労さんでした」
紙包みを持った益木と中岡が現れる。
加勢「左京！」
中岡「よっ」

○同・同・中（夜）
中岡、両手をついて加勢に頭を下げる。
中岡「頼む。銭を貸してくれ！　お前しか頼れる人間はいない」
加勢「地方の藩回って贋金作ってたらしいな」
中岡「職人を食べさせるためだ」
加勢「銭は西旗に相談したらどうだ？」
中岡「ああ見えて西旗は銭を持ってない。覚えているだろ。俺達は西旗に言われた通り金の量を減らして二分金を作ったが、外国から贋金扱いされて俺達は流刑だ。しかし、西旗の奴は有り金積んで流刑を逃れたんだ」
加勢「で。銭を借りて何に遣うつもりだ？」

中岡「銭湯だ」
加勢「銭湯？　まっとうだな」
中岡「トヨから聞いた。ここで働く者は仕事が終わったら大きな風呂に入る。それが気持ちいいらしい。堀江にある元貨幣司を改造して銭湯にする。今、改築中だが煙突を作る銭がちと足らなくてな。この通り頼む」
と、両手をついて頼む。
加勢「……」

○同・同・表（夜）
中岡、玄関から出て来る。
巾着に一礼して、それを懐にしまい、機嫌よく去る。

○同・同・中（夜）
加勢、益木の左手に摺ったアロエを置いて包帯を巻く。
益木「ほな、今日の話し合いでは外国人入れ替えの嘆願書をだすことに決めたんだすな」
加勢「そや」
益木「賛成！」
加勢「お前もか」
益木「え？　先生は反対だすか？」
加勢「俺は彫金ができたら構わん。造幣寮でなくても」
益木「先生。冷たいでんな。みんなの為に戦いまひょ。造幣寮辞めたらあきまへん」
加勢「今度は『俺に造幣寮を辞めるな』か」
益木「わてが間違うとりました」
加勢、包帯を巻き終わる。
加勢「それはそうと。トヨさん可愛い子だな」
益木「へぇ。トヨちゃんはほんまええ子だす」

○同・食堂・外（夕）
東の空から満月が上がってくる。
益木が一人立っている。
トヨが蒸気機関室の裏口から出てくる。
益木「トヨちゃん！」
驚くトヨ。に、近づいていく益木。

益木「蒸気機関室室になんの用だっか」
トヨ「その―　か、片付け、頼まれまして」
益木「待ってましてん。一緒に帰りまひょ」
　安堵するトヨと並んで歩きだす。

○同・鎮台・表（夕）
　鎮台Ａがガス燈に火をつけ終えた所。
トヨ「綺麗やね」
　トヨ、ガス燈に向かって祈り始める。
　益木もつられて祈る。
益木「何を祈ったんだすか？」
トヨ「皆さんがエゲレスの人と仲良うなれますように」
　と、笑顔を見せ、歩き出す。
益木「……　任せといておくれやす」
トヨ「え？」
益木「わて、エゲレス人と仲ようなれるよう精出しますよって」
トヨ「へぇ」

○同・日進学社・中
　ガウドの英語の授業。
　最前列。益木が表情を交えて復唱する。
益木「サッド　スマイル　クライ　ハッピー」

○同・鎮台・表
　桜の木の下、益木は一人で英語の教科書を読んでいる。

○同・長屋職員宿舎・中（夜）
　ガス燈の明かり。耳かきをする加勢。
　益木はエリーから英語を教わっている。
エリー「アイアムエリー　アンドユウ？」
益木「アイアムタイチ　アンドユウ？」

○同・貨幣鋳造所・極印製造室
　加勢と益木達は極印を作っている。
　益木、傍に英語の本を置き、「スマイル、クライ」とつぶやいて極印を作る。
加勢「（呆れて）エゲレス語熱心だな」

益木「へぇ。エゲレス人と喧嘩ばかりやのうて仲ようする方がええでっしゃろ。それにはまず、相手の言葉をしゃべることだす」
と、拳を作る。

○同・食堂・前（夕）
益木、英語の本を立ち読みしている。
食堂の女性が出て来るがトヨはいない。
益木「すんまへん。トヨちゃんは？」
女性A「トヨちゃんなら泉布観で、これだす」
と、ダンスのマネをする。
益木「なんやて！」
と、駆けて去る。

○同・泉布観・庭（夕）
庭の木に登り泉布観の二階を見る益木。
エゲレス人男女がダンスを踊っている。
その中、ドレス姿のトヨが踊っている。
益木「！」
強張った表情で踊るトヨ。
男のリードに振り回されている。
その男はサンドル（五九）である。
益木「―」

○天満宮・前（夕）
『天神祭』の提灯が門に吊られている。
エリー、屋台で団子を買う。
エリー、団子を一つ加勢に渡す。
加勢とエリー、団子を食べながら歩く。

○天満橋・周辺（夕）
屋台が出て祭りの雰囲気。
矢的の屋台。
益木、矢を放つが的を外しトヨが笑う。
益木「もう一回」
サンドルとデニスとニコル（三二）が顔を出す。酒に酔っている。
サンドル「ナイスミーチュー。トヨ」
トヨ、顔を背ける。
益木、サンドルの前に立つ。

＊以下、会話は英語。
益木「トヨの迷惑。あっち。行け」
サンドル「加勢の弟子じゃないか、お前は」
益木「そうだ」
サンドル「俺は誰だ？」
益木「サンドル首長」
サンドル「もう一度言ってみろ」
益木「サンドル首長」
サンドル「もう一度言ってみろ」
益木「サンドル首長」
サンドル「サンドル閣下と呼べ！」
益木「閣下とは天皇陛下やお国の偉い人等高貴な人を呼ぶ呼び方や。貴方は閣下やない」
サンドル「……来い。遊ぼうじゃないか」
益木「（日本語でトヨに）ここで待ってて」
デニスとニコルに引っ張られる益木。
デニス達に連れられ、人混みに消える。
トヨ「……」
× × ×
夜。大川で船渡御。神輿を乗せた船、太鼓を叩く船などが行きかう。
× × ×
朝。祭りの後。屋台をたたむ人達。
落ちた『祭』の団扇を踏み走り過ぎる姿。加勢、ガウド、トヨ、エリーだ。

○同・橋の下（朝）
警官の混じる人集りに走り寄る加勢達。
人集りに割り込む。
益木の遺体がある。痣や出血がある。
加勢「太一！」
と、その顔を抱きしめる。
トヨとエリー抱き合って泣く。
加勢「嘘だろ。起きてくれ。目を開けてくれ」
ガウド「……」
× × ×
木の陰に隠れた西旗（三七）、加勢達を見ている。その肩を叩く中岡の手。
中岡「見―つけた。この人殺し野郎」
と、走って逃げる。

西旗「待て！　左京」
と、中岡を追う。

○英国領事館・外観
T―『神戸　英国領事館』
二階建て西洋館。

○同・法廷
被告席にサンドルとデニスとニコルが並んで座っている。
傍聴席にガウドがいる。
ハウル・ナイス（三三）が起立する。
＊以後、会話は英語。
ナイス「領事入廷。起立！」
全員、起立する。
エイベル・チャールズ（四七）が法衣で入廷する。中央の判事席に座る。
判決文を広げる。
チャールズ「主文。被告を無罪とする」
ガウド「……」
チャールズ「暴行当時、被告は泥酔状態にあり著しく判断能力を欠いていた。従って、事故死と認定し、被告の罪はない。以上」
サンドル「いい判決だ」
と、大声で笑う。
領事の木槌が強く叩きつけられる。
チャールズ「不謹慎ですぞ！」
サンドル、直立不動する。
ナイス「領事退廷」
チャールズ、法廷を出ていく。
ガウド、法廷を出る。

○同・廊下
ガウド、チャールズを呼び止める。
＊以後、会話は英語。
ガウド「領事！」
チャールズ「なんだね？」
ガウド「泥酔で判断能力の欠けた人間が、酒に酔っていない人を殴り殺すことが本当に出来るのでしょうか」

チャールズ「君は何を言いたい？」
ガウド「泥酔であったか疑問です。再審を」
チャールズ「君は弁護士かね？」
ガウド「違います」
チャールズ「法廷の侮辱は許さん」
と、去っていく。
ガウド「領事。待って下さい！　法衣が汚れています。洗濯をした方がいい！」
チャールズ、執務室に入る。
ガウド「……」

○同・執務室
チャールズ、ドアを閉め、難しい顔をする。その場に立ち尽くす。

○造幣寮・長屋職員宿舎・中
益木の位牌がある。（傍にはるの位牌）
益木の位牌をじっと見る加勢の姿。
×　×　×
（フラッシュ）
鑿をやすりで研ぐ益木の姿。
益木と酒瓶を奪い合う姿。
極印を彫りながら英語を復唱する益木。
×　×　×
益木の位牌の前。加勢、むせび泣く。

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室
神棚、機械が並ぶも職工の姿はない。
外から「サンドル追放」の声がする。

○同・サンドル詰所・入口前
『サンドル追放』『エゲレス人追放』
『人殺し出て行け』の札を掲げ、沢山の職工達が叫んでいる。
西旗が入口から出て来る。
西旗「シャラップ！　サンドル閣下には無罪判決がでている。即刻、抗議を止めろ！」
工藤「聞いたで。エゲレス人は治外法権ちゅうもんがあって日本で何しても無罪になるそうやないか。ここは日本や！　わてらに

裁かさせんかい！」
西旗「日本人には日本の法律を。エゲレス人にはエゲレスの法律を適用する。当然だ」
工藤「屁理屈ばかり言うな。お前と話しても埒があかん。みんな、井上はんの所にサンドルを辞めさせるよう直談判に行くで」
一同、「おう」と動こうとする。
西旗「造幣頭に閣下を辞めさせる権限はない」
工藤「なに？」
西旗「サンドル閣下は日本国の採用に非ず」
工藤「ほな、誰が採用してんねん」
西旗「オリエンタルバンクだ」
工藤「誰やねん、それ」
西旗「エゲレスの銀行だ。銀行はサンドル閣下をはじめ他の外国人も解雇をしない」
工藤「西旗。お前、どっちの人間や。エゲレス人の肩ばっかりもちやがって」
浅香「俺らはお国の為、歯を食いしばって銭を作ってんねん。俺達をなめんな」
「そやそや」「この売国奴」と西旗に石が投げられる。
石が当たり頭から血を流す西旗。
西旗「くたばれ！　下人ども！」
と、入口を入っていく。
投石が激しくなる。
ガラスを割り、壁を壊していく。

○六甲山・山中
チャールズ、ライフル銃を構える。
傍のサンドル、口笛を鳴らす。
キジが飛び立つ。
チャールズ、発砲する。キジが落ちる。
サンドル、拍手する。
＊以後、会話は英語。
サンドル「お見事。いかがですか、アメリカウィンチェスター製の銃は？」
チャールズ「まぁまぁだ」
サンドル「……　つまりリラックスして撃てます。対して狙われた獲物はもっとも恐れを感じます。他に類を見ない最高の銃です」

チャールズ「商売人の口ぶりだな。買えと？」
サンドル「滅相な。私からのプレゼントです」
チャールズ「君も撃ってみたまえ」
と、銃を渡す。
サンドル、銃を構え、口笛を鳴らす。
キジが飛び立つ。
サンドル、発砲するがキジに当たらず。
チャールズ「残念」
連発で発砲する音。キジが落ちる。
サンドル「快感。連発ができる最新式です」
チャールズ「……」

○造幣寮・俯瞰
暴動の跡。破壊物が散らばり人影なし。
その中を井上（三九）と大隈（三七）
と久世（四九）が歩く。

○同・サンドル詰所・入口前
井上と大隈と久世が来て、立ち止まる。
投石でボロボロの外観。
置かれた『サンドル追放』等の看板。
横倒しになった馬車鉄道の馬車。
中央鋳造室のガラスも割れている。
井上「この国の民は暴力に頼る馬鹿ばかりだ」
大隈「折角、我が国の銀貨が東洋で流通するようになったというのに」
久世「職工達は次の追放運動を考えています」
大隈「そんなことをしたらこの国は世界から見放される。こんな状態で貨幣鋳造できないなら経済も立ち行かない。日本は破綻だ」
井上「先ほどサンドルから話があった。今度、暴動を起こせば日本人を全員解雇。貨幣鋳造は全て外国人ですると」
久世「何か良い方策はないものか」
弦楽四重奏のワルツが聞こえてくる。
久世「こんな時にエゲレス人は踊りですか」
井上「ダンスは平和的解決方法だ」
と、泉布観に向かっていく。
大隈、苦笑いを見せ、ついていく。
久世、見送り、引き返していく。

○同・長屋職員宿舎・中（夜）
久世、畳につけた頭を上げて、
久世「加勢殿だけが頼りです。なんとか暴動を止めるよう説得してくださらんか。日本人の手で鋳造する夢が失くなってしまう」
益木の位牌の前に座る加勢、無反応。
入口から工藤と平沼が入ってくる。
久世「何をしに来た？」
工藤「加勢はんを誘いにきたんや。加勢はん。あんたが一番エゲレス人を憎んどる。明日のエゲレス人追放運動にあんたが参加してくれたら、わてら怖いもんなしや。頼むわ」
久世「止めろ。仕事を失くすぞ」
工藤「死人が出てるんや。俺らの命も覚悟や」
加勢「……」
久世「忘れたか。我々は圧印の技術を手に入れ日本人の手だけで銭を作るのが目的だ。目的を忘れて軽はずみに命の覚悟をするな。それに、外国人を追放しても又、次の外国人が来て銭を作る。完全な追放など出来ん」
工藤「なんぼでも来たらええがな。日本に来たくなくなるまで追い返すだけの話や」
平沼「そや。置き土産に圧印の仕方も吐かせたらええ」
久世「間違っておる。暴力をふるうのではなく智慧を搾るのだ。どうすれば野蛮人と言われずに済むのか。どうすれば圧印を教えてもらえるのか。智慧だ。智慧こそが屈辱を晴らす武器なんだ」
加勢「……」
ガウド、息を切らせて来る。
ガウド、加勢を一瞥する。
益木の位牌をじっと見ている加勢。
ガウド、久世にメモを渡して走り去る。
工藤、メモを覗き見る。
工藤「せんぷかんにいる？　どういうことや」
○同・泉布観・庭（夜）
泉布観の二階で舞踏会が行われている。
久世と工藤・平沼が木を登る。

舞踏会場の隅にワインボトルを載せた盆を持ち立っているトヨ、久世達に気づき部屋を出る。

久世「ガウド殿。仔細も言わず、いったい」

工藤「（遮り）シッ。ガウドはんや」

バルコニーにガウドと島津（三三）が出てきて話し始める。

平沼「誰やあれ？」

ガウド、島津の上着を引っ張り、丸に十字の家紋を見て、島津に話しかける。

工藤「あれは島津の家紋」

平沼「薩摩のもんがどうして？」

久世「たしか、今、薩摩は政府と対立していると聞いたが」

平沼「何か企んどるんかもわからんな」

サンドルがバルコニーに現れ、島津とガウドを室内に連れて入っていく。

トヨが周りを気にしながら来る。

工藤「トヨはん」

木から下りる久世、工藤、平沼。

トヨ「みなさん。聞いとくれやす。実はサンドルはんは薩摩のお武家はんに鉄砲を売るつもりだす。今、薩摩の船が銭積んで大阪に向こうてる最中やて」

工藤「ほんまか！」

トヨ「ほんまだす。さっき話しておいでるのを聞きましたんや」

久世「政府についたグラバーから武器を買うのを止め、元エゲレス軍少佐のサンドルに武器の調達を薩摩は頼んだということか」

平沼「サンドルの裏の顔見えましたな」

工藤「そやけど、あんさん、なんでわて等に」

トヨ「ガウドはんに言われまして」

平沼「ガウドはんに？　あの人もトヨはん巻き込むなんてあこぎやな」

トヨ「違うんだす。わてが太一はんのために何かでけへんかガウドはんに頼んだんだす」

工藤「そないに益木はんを」

トヨ「実はわて、兄はんから造幣寮のことを探るように言われて出仕始めたんだす。そ

やし、こういうことは慣れてるんだす」
平沼「そやったんかいな」
工藤「追い出すにはええ情報や。おおきに」
と、平沼と去ろうとする。
久世「待て。工藤殿」
工藤達、久世を無視して去っていく。
トヨ「加勢はんは来てはれへんのだすか」
久世、苦笑いを浮かべ溜息をつく。
ガウド、バルコニーから久世を見てる。

○同・サンドル詰所・入口前（朝）
『エゲレス人追放』等の看板をもって
職工達が行進してくる。
久世、両手を広げ、止めようとする。
久世「止まれ！　ここから先には行くな！」
工藤「久世はん。危ないからどいとくれやす」
と、久世を無視して行進を続ける。
久世「頼む。止めてくれ。今、お前達が暴動
を起こせば、この国の未来はない！」
加勢が行進の先頭に立ちふさがる。
加勢「俺も参加するぞ」
久世「！」
工藤「加勢はん！」
職工達、「加勢はんや」と高揚する。
加勢「但し、俺のやり方に従ってくれ。必ず、
圧印の仕方を手に入れる。そして、エゲレ
ス人を追放する」
職工達、頷いたり「頼んだで」等言う。

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室
加勢を先頭に沢山の職工達がいる。
対峙してサンドルを先頭にエゲレス人
達がいる。お互いにらみ合う。
加勢、短刀を取り出す。
刃先をサンドルに向ける。殺気が走る。
加勢、そのままサンドルに詰め寄る。
刃先がサンドルの目の前まで来る。
サンドル「！」
加勢、刃先を変え、自分の髷にあてる。
髷を落とす。

一同、驚く。
加勢、落とした髷を強く握る。震える。
加勢「（英語）髷を落とした。今後も日本人に銭を作らせてください」
と、土下座をする。
サンドル「……」
工藤・平沼・久世・ガウド「……」

○同・長屋職員宿舎・中
益木の位牌の横、切落とした髷を置く。
髷を見つめる散切り頭の加勢。
加勢「太一。とうとう、髷を落とした。あいつらに負けたんじゃない。勝つためだ」

○同・貨幣鋳造所・中央鋳造室
職工達が働いている。
ニコルが平沼の前に箱を持ってくる。
平沼や職工達の手が止まる。
箱から割れた一圓銀貨をばらまき、
ニコル「（英語）割れたぞ。全部やり直せ」
と、去っていく。
平沼「この割れ方。わざと割ってやがるんだ」
工藤「いつも通り仕事続けるんや。加勢はんの言う通りに。俺が必ず圧印の仕方を盗む」
平沼、割れた銀貨を鷲掴みに拾う。
職工達も仕事を続ける。

○天保山・沖（夕）
大雨で見通しの悪い海。
薩摩の帆船が浮かんでいる。
帆には丸に十字（島津）の家紋がある。
傍の小さな和船が離れていく。
薩摩の帆船が爆発する。
帆船が傾き、沈んでいく。
×　×
和船から頬被りした中岡が見ている。

○造幣寮・泉布観・客間（夕）
元気なく酒を注いでいるトヨ。
大きなテーブルで薩摩の藩士とサンド

ルが会食をしている。
サンドル、機嫌よく談笑している。
藩士が入ってきて島津に耳打ちをする。
島津「何！　誰の仕業だ？」
藩士「わかりません。今、調べております」
島津「銭は？」
藩士「なんとか丘にあげました」
島津「わかった。ミスターサンドル」
サンドル「（英語）何かね。ミスターシマヅ」
トヨ、知らぬ顔で料理を運んでいる。

○同・波止場（夜）
強い雨の中、蒸気船が着く。
船からデニス達が千両箱を担いで降りて来て、前にある倉庫に運んでいく。

○同・倉庫の前（夜）
ランプを持つ西旗と傘をさす島津。
倉庫の中に千両箱を運ぶエゲレス人達。
西旗と島津、倉庫の中に入っていく。

○同・倉庫・中（夜）
西旗と島津、千両箱の傍に行く。
島津が箱を開けると、ソブリン金貨（一ポンド金貨）が詰まっている。
西旗「島津殿。安心下さい。造幣寮で銭を預かるのが一番安全です。倉庫の鍵は私が肌身離さず持ちます。誰も出入りできません」
島津「かたじけない。しかし、船がないと鉄砲は運べん。先方に迷惑が」
西旗「船の用意ができるまで取引を待ってもらいましょう。マンチェスター社に伝えます」
島津「半月ほど時間をください」
西旗「わかりました」
島津「何から何まで助かります」

○同・溶鉱炉室・表（朝）
杖を突きながらサンドルとデニスが急ぎ足で来る。扉を開けて入っていく。

○同・同・中（朝）
急ぎ足でサンドルとデニスが入る。
職工が溶鉱炉にソブリン金貨を入れる。
サンドル「！」
傍に空になった千両箱が山積み。
西旗が入ってくる。
千両箱や溶鉱炉の中を覗き呆然とする。

○同・倉庫へ向かう道路（朝）
杖をついて歩くサンドルと西旗。
＊以後、会話は英語。
サンドル「（英語）西旗。どういうことだ！」
西旗「職工の話だと、朝、来たら千両箱が積んであったから箱の金貨を入れたそうです」
サンドル「ソブリン金貨だぞ。わかるだろ！」
西旗「外国の貨幣をいつも溶かしているので何も思わなかったと」

○同・倉庫・前（朝）
鍵が壊されて扉が開いている。
杖をついたサンドルと西旗が来る。

○同・倉庫・中（朝）
サンドルと西旗が入ってくる。
倉庫内に千両箱はない。居るのは島津。
抜刀してサンドルの首に刃を突きつけ、
島津「（英語）私の銭はどこだ？」
サンドル「―」
島津「（英語）あの銭で薩摩の存亡が決まる。盗まれたとあったら、お前の首ぐらいで事は済まない。分かっているな」
西旗「……　島津様。ご安心下さい。ここは荷下ろし場に一番近い、言わば仮りの倉庫。誰も知らない秘密の場所に銭を移しました」
島津「……　さようか」
と、笑って刀を鞘に納め、去っていく。
胸をなでおろす西旗とサンドル。

○同・サンドル詰所・中
西旗の前をサンドルが苛ついて歩く。

＊以後、会話は英語。
サンドル「誰の仕業だ。日本人を全員調べろ」
西旗「今は犯人捜しより、一〇万ポンドを用意することが先です」
サンドル「そいつは今頃笑っているぞ」
西旗「島津の怒りは本物です。閣下の命が」
サンドル「くそっ。どうすればいいんだ！」
西旗「私に金を準備する妙案がございます」

○元貨幣司・表
T―『大阪堀江　元貨幣司』
塀で囲まれた屋敷。
半分が武家屋敷と蔵、半分が銭湯。

○同・中
サンドルとデニスと西旗が入ってくる。
土間に旧来の貨幣作りの火場がある。
サンドル「（英語）なんの設備だ？」
西旗「（英語）御一新後、政府の注文で二分金、一分銀をここで作っておりました」
散切頭の中岡が引き戸を開けて現れる。
中岡「お待ちしておりましたぜ。西旗殿」
西旗「似合っているぞ、その頭」
中岡「ありがとうございます」
西旗「早速だが、閣下にご案内を」
中岡「へぇ。プリーズ」
と、蔵に向かう。

○同・蔵・中
屋敷の隣の大きな蔵。
扉を開けて中岡とサンドルと西旗とデニスが入ってくる。
＊以後、会話は英語。
サンドル「素晴らしい！」
エゲレスの貨幣鋳造機械が揃っている。
天井にシャフトが通っている。
西旗「隣の銭湯に蒸気機関があります」
サンドル「どうやって手にいれた？」
中岡「へぇ。実に簡単なことです。建設中の造幣寮に付け火をして仲間と持ち出しまし

た。本当に贋金を作って儲けてやろうと思いましてね。西旗様と一緒に」
西旗「出まかせを言うな」
サンドル「そういうやつだ西旗は」
中岡「それで何を作りましょう？」
サンドル、ポケットから数枚のソブリン金貨を取り出し、一枚を中岡に渡す。
サンドル「ポンドだ。一ポンド金貨十万枚。一日一万枚として一〇日で作れ」
中岡「急なご注文で。今すぐ十万枚分の金を支度できません」
サンドル「造幣寮から運ばせる」
中岡「困ったことがもう一つ。こいつらを組み立てて動かせるヤツがいません」
サンドル「デニス。お前がやれ」
デニス「はい。しかし、十万枚作るには一日一二時間機械を動かす必要があります。造幣寮とここを掛け持ったら寝る時間がありません。どちらかにしてもらわないと」
サンドル「造幣寮は外せん。お前の代わりにこいつらに作り方をみっちり教えろ」
デニス「わかりました」
サンドル「（中岡に）一〇人、早急に集めろ」
中岡「ご心配なく」
手を叩くと、和服に髷姿の男達が一〇人、姿を現す。
中岡、一人の頬を殴る。
驚くサンドルとデニス。
中岡「（日本語）サンドル様は髷がお嫌いだと言ったろ。今すぐ髷を落とすか隠せ」
男達、手ぬぐいを頭に巻き、髷を隠す。
サンドル、頷く。
中岡「失礼しました。元々、ここで働いていた者達で髷にこだわってやがるんです」
サンドル「極印は作れるんだろうな？」
中岡「彫金には心得があります。お任せを」
西旗「金を作っていた奴等です。ご安心を」
サンドル「本物以上を作れ」
と、西旗とデニスと一緒に去っていく。
裏の入口が開く。加勢が入ってくる。

中岡、加勢にソブリン金貨を渡す。

○造幣寮・貨幣鋳造所・極印製造室
俵達、『圓』の極印を作っている。
加勢、ソブリン金貨を見ながら極印にヴィクトリア女王の横顔を彫っている。

○元貨幣司・中
デニスの指導のもと、元貨幣司の職工が機械を設置している。

○造幣寮・貨幣鋳造所・極印製造室
加勢、ソブリン金貨の極印を完成させ手に取りヴィクトリア女王の姿を見る。

○元貨幣司・銭湯・表（夕）
煙突から煙が出ている。

○同・蔵・中（夕）
シャフトが動きだす。
手ぬぐいを頭に巻いた元貨幣司職工がエゲレス人達に指導を受けている。
×　×　×
圧印機のところにデニスと職工がいる。
デニス、圧印をやってみせる。
デニス「（英語）やってみろ」
手ぬぐいを被った職人、円形を機械に送入する。機械が圧印する。
取り出すと、少しずれている。
デニス「（英語）もう一回」
職工、やってみる。
円形の送入に遅れる。
デニス、機械のレバーを押す。
機械、圧印せず止まる。
デニス、胸を撫で下ろす。
デニス「空打ちしたら極印が潰れる。極印は一日に一個しかできない。極印が潰れたら仕事は終わりだ。気をつけろ」
職工、何度も頭を下げる。
デニス、機械のレバーを調整する。

真剣な表情で調整している。
その姿を見る職工、実は工藤である。
デニス「（英語）やってみろ」
工藤、円形を見つめる。
機械に送入する。機械が圧印する。
取り出すと綺麗に圧印できている。
工藤、貨幣になった円形を見つめる。
デニス「（英語）上等だ。もう一回」
工藤、圧印する。
綺麗に圧印されている。
また綺麗に圧印される。
またまた綺麗に圧印される。
デニス「（英語）驚いた。もうマスターしや
がった。休憩後、機械の調整方法を教える」
と、去ろうとする。
工藤「（俯いたまま）ミスター　デニス！」
デニス、立ち止まり、振り向く。
工藤「（俯いたまま）サンキュー」
デニス「（英語）どういたしまして」
と、去っていく。
工藤、握ったソブリン金貨を見る。
中岡が工藤を見て、ほくそ笑む。

○造幣寮・長屋職員宿舎・中（夜）
工藤が他の職工達にソブリン金貨を見
せて喜びを分かち合っている。
トヨも喜んでいる。
加勢とガウド、握手する。
加勢、そっと部屋を出ていく。
平沼「これで貨幣を作る工程が全て手に入っ
た。加勢はんのお陰や。残るは外国人の追
放や。な、加勢はん。あれ。加勢はんは？」
ガウド「知りません」

○同・鎮台・表（夜）
ガス燈の明かりの下、エリーがいる。
加勢が現れる。
エリー「ナツオ。すごいやん！」
加勢「俺の力じゃない。みんなの力だ」
エリー、加勢に抱きつく。

加勢「エリー、止めろ」
エリー「なんで？」
加勢「俺達は友達」
エリー、すねた顔をする。

○酒屋・外観（夜）
二階建ての酒屋。
二階でドンチャン騒ぎをしている音。

○同・二階（夜）
元貨幣司の職工達が芸者をあげて酒を飲んでいる。

○造幣寮・鎮台・表の川岸（夜）
加勢、辺りを見回し、川岸に座る。
西旗が忍び足で来て、鎮台に隠れる。
エリー、花のワルツを口ずさんで踊る。
エリー「ナツオ。一緒に踊ろうや」
加勢「……」
エリー「ほんまシャイやな」
と、座り、加勢の肩に頭を寄せる。
加勢「……」
エリー「外国人追放の嘆願書、本当に出す？」
加勢「……」
エリー「私も。追放する？」
加勢、エリーを一瞥して目を反らす。
エリー「わて。ナツオと一緒に居たい」
鎮台に隠れた西旗が見ている。

○酒屋・二階（夜）
中岡、立ち上がりソブリン金貨を撒く。
中岡「おら。もってけもってけ。銭踊りじゃ」
金貨を群がって拾う芸者や職工達。
一枚の金貨が廊下を転がる。
階段を転がり落ちる。

○同・一階酒場（夜）
金貨が階段を転げ落ちて来る。
一人で呑んでいたナイスが気付く。
ナイス、金貨を拾う。

二階から中岡が「俺らは天下の銭作り」と、騒いでいるのが聞こえてくる。
拾った金貨はソブリン金貨。
ナイス、二階に上がろうとする。
店主に「上は貸切ダメ」と止められる。
ナイス「……」

○英国領事館・領事室
ソブリン金貨を見るチャールズ。
ポケットからソブリン金貨を取り出して見比べ、重ねてみる。同じである。
二枚の金貨を天秤の皿にそれぞれ載せ、天秤を持ち上げるとつり合いが取れる。
＊以後、会話は英語。
チャールズ「これは贋金ではなく本物の金貨」
ナイス「昨夜、その金貨を手にした時、鋳造したての温もりを感じました」
チャールズ「それだけで贋金と判断できん」
ナイス「年号を見て下さい。五年前です。それなのに傷一つない」
チャールズ「その男達の顔を見たのか？」
ナイス「店主に止められて、見ることができませんでした。『客は誰か』と聞きましたが一見の客ということで、店主も座敷に居た芸者も誰か知りませんでした」
チャールズ「わかっているのは日本人がこの金貨を作ったということだけか」
ナイス「これは大英帝国への侮辱です。奴隷が主人から与えられた鍬で主人を襲うようなものです。主人を襲った奴隷は死刑」
チャールズ「さもありなん」
ナイス「金貨を作った日本人を捕まえ、英国で処刑にしましょう」
チャールズ「……　これを作るにはそれ相当の設備と機械が必要だ。場所は絞られる」

○造幣寮・貨幣鋳造所・極印製造室
俵（三〇）達が極印を彫っている。
加勢、ソブリン金貨の極印を彫る。
チャールズとナイスが入ってくる。

加勢、彫る手が止まる。
ナイス「皆さん。そのまま。動かないで」
加勢「……」
ナイス「捜査に協力、お願いします」
チャールズとナイス、作成中の極印を見ていく。
一人目、圓の極印。
加勢、引き出しを開け、素早くソブリン金貨・極印と圓の極印をすり替える。引き出しを閉める音がする。チャールズ、加勢と閉めた引き出しを見る。
が、二人目に向かう。
二人目、圓の極印。
三人目に向かう。
三人目、圓の極印。
最後、加勢に向かう。
サンドルの声「（英語）領事！」
サンドル、汗をかいて入って来る。
＊以後、会話は英語。
サンドル「勝手に寮内を回られては困ります。ここは私の許可が必要です」
チャールズ「同時に私の捜査権を行使できる範囲だ。君を含めて」
サンドル「……」
加勢、引き出しを開け、手を奥に入れごそごそとして、引き出しを閉める。
サンドル「私も協力します。何の捜査ですか」
チャールズ「捜査上のことは言えない」
サンドル「日本人が何かしでかしたのなら、教えて下さい。私が処罰します」
チャールズ「経理の日本人に訊いたところ、なぜか金銀の在庫の帳簿を君が管理していると聞いた。後日、見せてもらえるかね」
サンドル「……わかりました」
と、部屋を出ていく。
チャールズ、加勢の極印を見る。
圓の極印である。
＊以後、会話は日本語。
チャールズ「美しい彫刻だ。君が加勢か？」
加勢「はい」

チャールズ「ガウド君が来てね。君を褒めていたよ。本物以上の極印を作る男だと」
と、机の引き出しを指さし、
チャールズ「ＯＫ？」
他の職工、緊張する。
加勢、「どうぞ」と仕草をする。
チャールズ、引き出しを開ける。
鏨が数本と青い巾着が入っている。
巾着を取り上げて一枚貨幣を取り出す。
両面とも龍の見本貨幣である。
加勢「失敗作です」
チャールズ「気に入った。記念にいいか？」
加勢「どうぞ」
チャールズ「サンキュー」
と、巾着をポケットに入れてナイスと
一緒に部屋を去る。
加勢、胸をなで下ろす。
加勢、開いた引き出しの奥に手を突っ込み底の浅い引き出しを引っ張り出す。
その中にソブリン金貨と極印がある。
二重底の引出しであった。

○元貨幣司・中
職工達が金貨を作っている。
圧印された金貨が千両箱に入れられる。
職工、千両箱を積み上げていく。
どんどん積み上げていく。

○神社・本殿（夕）
加勢、賽銭箱に極印を入れようとすると足音がする。振り向くと中岡がいる。
加勢、極印を中岡に渡す。
加勢「製造枚数を数えてるんだろうな」
中岡「心配すんな。箱の底上げをして十万枚あるように見せかける。そして、島津が実際、数えると九万枚しかない。怒った島津はサンドルを。だろ？」
加勢「殺させない。俺達の狙いは外国人追放」

○元貨幣司・中

沢山の千両箱が積んである。
中岡と西旗が扉を開け入ってくる。
西旗「何枚できあがった？」
中岡「八万枚」
西旗「予定通りだ。残り二万枚後二日で頼む」
中岡「へぇ」
扉が開き、すぐ閉まる音がする。
西旗「誰た！」
と、扉を開けると女が去るところ、
西旗「止まれ！」
女、止まる。
西旗「顔を見せろ！」
振り向いた女はトヨであった。

○造幣寮・サンドル詰所・中（夕）
流れる汗を拭くサンドル。
沢山の帳簿が山積みになっている。
チャールズが帳簿のページを捲る。
じっくりと見る。
＊以後、会話は英語。
サンドル「……」
チャールズ、帳簿を閉じる。
チャールズ「失礼した」
と、ナイスと一緒に部屋を出る。
サンドル、胸をなでおろす。
西旗が入ってくる。
サンドル「我々のポンド作りを領事が捜査しているようだ。さっさとポンドを作らせろ」
西旗「私も気になることが」
サンドル「何だ？」
西旗「先日、加勢とエリー女史の会話を聞きました。加勢は外国人追放の嘆願書を出すようです」
サンドル「しっぽをつかんだな。女もか？」
西旗「女は追放される側です。もう一つ、気になることが。中岡と給仕のトヨは兄妹であることがわかりました」
サンドル「……　デニスとニコルを呼べ。お前は明日中に金貨十万枚仕上げさせろ」
西旗「はっ」

○神社・本殿（夕）
加勢、袖から金貨の極印を取り出す。
賽銭箱に入れて、柏手を打つ。
足音がして振り向くとニコルが石で殴りかかってくる。避けて左肩を殴られる。膝まづき倒れ肩を右手でかばう。
その右手を石でつぶされる。
中岡の声「人殺し！誰か来てくれ。人殺しだ」
ニコル、石を捨て、走って逃げる。
中岡、走って加勢の傍まで来る。
ニコルが戻ってこないのを確認する。
中岡「大丈夫か！」
加勢の右手は血だらけで震えている。
中岡「ひでーことしやがって」
加勢「大丈夫だ。極印は賽銭箱の中だ。行け」
中岡「馬鹿野郎、医者に行くぞ」
加勢「構うな。予定通り動け。計画が台無しになる」
中岡「お前ってやつは」
と、賽銭箱の引き出しを開ける。

○造幣寮・食堂・表（夜）
食堂の明かりが消えてトヨが出てくる。
大きな人影がトヨに背後から近づく。
トヨの口を塞ぐ。男はデニスである。

○酒屋・表（夜）
ナイスが立っている。
中岡が懐に手を突っ込んで現れる。
中岡、ナイスと目が合う。
が、知らぬ顔して通り過ぎる。
ナイス、中岡の後ろをつける。

○町中（夜）
中岡が歩く、後ろをつけて歩くナイス。
×　×　×
角を曲がる中岡。ナイスがあとを追う。
中岡、早歩き、ナイスも早歩きになる。
中岡、角を曲がる。
ナイス、走ってきて角を曲がる。

元貨幣司・塀の外（夜）
　塀に挟まれた道。誰も居ない。
　ナイス、見上げると銭湯の煙突から煙が上がっている。隣に大きな蔵がある。
　ナイス、去っていく。

○同・塀の内側（夜）
　去っていく足音に息を殺している中岡。
　足音が聞こえなくなり、息を吐く。
　西旗とニコルが姿を現す。
中岡「これはこれは西旗殿」
西旗「予定が変わった。貨幣を明日一日で残りの二万枚作れ」
中岡「それは無理だぃ」
西旗「無理とは言わせない。カモン」
　デニスが縄で縛ったトヨを連れてくる。
中岡「トヨ！　西旗、てめぇ」
西旗「領事が動いている。明後日の朝、十万枚引取りにくる。トヨはそれまで人質だ。念のためニコルが製造枚数を確認する」
　中岡、握りこぶしを作る。

○造幣寮・造幣頭室
　井上と大隈とバーク（四三）が話す。
　＊以後、会話は英語。
井上「なんですと！　理由は何ですか？」
バーク「オリエンタルバンクが南米チリで大きな損失を出した」
井上「それは我が国に関係ありません」
バーク「承知している。しかし、ビジネスとはそういうものだ」
井上「返済額の増額に応じられません。それに金貨鋳造量を増やしていただかないと」
バーク「（遮り）この造幣寮を英国に譲っていただく。準備はできているはずだ大隈氏」
大隈「……」
井上「（日本語）準備？　大隈」
大隈「（日本語）造幣寮を担保に融資を受けた。合わせて単位を『圓』にする条件で」
井上「（日本語）『圓』にしたのは子供でも

わかるように国民になじませるためでは？」
大隈「（日本語）閉鎖した香港造幣局と同じ単位にした。エゲレスの要望を受けて」
バーク「返事の期限は一か月だ」
と、席を立ち部屋を出る。
井上と大隈、うなだれる。

○同・貨幣鋳造所・極印製造室
右手に包帯を巻いた加勢。
エリーや俵や職工達が囲んでいる。
俵「わてに彫らせて下さい」
加勢「俺が彫る。トヨさんが人質になった以上、十万枚の金貨を用意するんだ」
と、中岡からの手紙を見ている。
俵「彫るってどないやって彫るんだす。骨折ってますねんで。三か月は鏨を握れまへん」
加勢「左手が使える」
俵「左手で鏨を持てても金槌打てまへんがな」
加勢、鏨を不器用に持つ。
鏨は極印を滑って、手から離れる。
加勢「……」
エリー「ナツオ。彫って。最後の一枚。明日、外国人追放するために」
加勢「エリー」

○同・馬車鉄道
馬二頭が車両を引っ張っている。

○同・同・中
サンドルとバークが乗っている。
＊以後、会話は英語。
バーク「薩摩との武器取引はいつだった？」
サンドル「四日後です」
バーク「その日は立ち会えない。よろしく」
サンドル「お任せください」
車両が止まる。席を立つバーク。
バーク「加勢の右手を潰したのは君かね？」
サンドル「少し懲らしめてやりました。あいつは英国の敵―」
バーク「（遮り）加勢は欠かせない男だ」

サンドル「……」
バーク「ここで作られた貨幣は今やアジアで大人気だ。二、三年後にはメキシコドルより流通量を上回ることになる。なぜ、こんなに人気があると思う？」
サンドル「それは両目、品位ともどの通貨よりもより安定しているから―」
バーク「（遮り）最大の理由はデザインだよ」
サンドル「は？」
バーク「加勢が描いた龍のデザインがアジア人の心を鷲掴みにしている」
サンドル「……」
バーク「我々は東洋人の心をつかめなかった。香港造幣局の閉鎖に追い込まれた。メキシコドル駆逐という我々の目的がここで達成されようとしている。この造幣寮が我が国のものになった日に、加勢がいなければ、この造幣寮の価値はない」
サンドル「……」
バーク「今後、加勢に手をだすな。自分の首を絞める事になる」
と、車両を降りていく。
サンドル、自分の杖を両手でへし折る。

○同・貨幣鋳造所・極印製造室
加勢、鏨を金槌で叩いて短くする。
短くなった鏨に布を巻く。
何重にも巻く。
鏨の刃先を出し丸く毬のようになる。
加勢、口に銜える。
極印に刃先を当てて極印をこする。
加勢、むせて鏨を吐き出すし、えづく。
再び、鏨を銜えて極印を彫り始める。
銜える布に血が滲む。
彫りが彫刻になっていく。
布の血が極印に落ちる。
極印の血を拭く。
加勢、左手で血に染まった鏨を握る。
布から血が絞り落ちる。
加勢、再び鏨を銜え極印を彫り始める。

○同・同・外壁（夕）
月が出ている。極印製造所の外側。
エリー、窓の隙間を開ける。
中で加勢が鑿を口に銜え彫っている。
エリー「……」
メモを窓に挟んで去る。

○元貨幣司・塀の外（夕）
ナイス、煙突からでる煙を見ている。
塀に手をかけて登ろうとする。

○同・塀の中（夕）
塀を乗り越えたナイス、驚く。
首のない鶏が吊るされ、その下の桶に鶏の血が溜まっている。
ナイス、早々にその場を離れ屋敷に近づき、中を覗ける場所を探す。
蔵から千両箱を担いだ男A・Bが出て来て屋敷に入る。扉が開けっ放し。
ナイス、そこから屋敷内を見る。
沢山の千両箱が積んである。
男B、千両箱を置き損ねて落とす。
蓋が開き、ソブリン金貨が散らばる。
ナイス「！」
男A・B、金貨を集める。
男A「徹夜続きや。しゃあない」
男B「すまん」
男A「頑張ろうや。明日の朝、この銭を相手はんが引き取りに来たら鶏料理や」
男B「そやな」
ナイス「……」

○英国領事館・表（夜）
馬車が到着するやいなや、馬車からナイスが降りてきて急いで入口に向かう。

○英国領事館・領事室（夜）
チャールズ、執務をしている。
ドアが開き、ナイスが入ってくる。
＊以下、会話は英語

ナイス「領事、金貨鋳造場所がわかりました」
チャールズ「何！」
ナイス「明朝、作った贋金の受け渡しです」
チャールズ「その場で一網打尽だ」
と、傍のウィンチェスター銃を手に取り、構える。

○神社・境内（夜）
中岡、賽銭箱の受け皿を取り出す。
極印がある。手に取ると血がついている。匂いを嗅ぐ。そのあと握りしめ、
中岡「血の匂いだ。すまない。トヨのために」

○造幣寮・貨幣鋳造所・極印製造室（夜）
加勢、鏨を片付けている。
傍に右手を伸ばす女性の図柄のコイン。
窓にメモが挟んであるのに気付く。
メモをとり開く。『アイタイ　come to センプカン　エリー』と書いてある。
加勢「……」

○同・泉布観・二階（夜）
月明りだけの室内。
エリー、窓辺に立ち、月を見ている。

○同・同・庭（夜）
木の陰で泉布観を見る加勢。
エリー、出てきてバルコニーに立つ。
寂しそうな顔のエリー。
加勢「……」
×　×　×
（フラッシュ）
エリー、花のワルツを口ずさんで踊る。
エリー「ナツオ。一緒に踊ろうや」
ガウド「結婚を先延ばしする為にエリーは日本に来ました。エリーと友達でいて下さい」
エリー「私も。追放する？」
×　×
バルコニーに立つエリーを見る加勢。

○元貨幣司・中（夜）
　積まれた貨幣の前に座る中岡。
　金貨を一枚持ち、じっと見つめる。
中岡「トヨ。明日、助けてやるからな」
　腹に巻いたサラシにその金貨を入れる。

○造幣寮・外観（朝）
　朝日に照らされる造幣寮。

○同・波止場（朝）
　蒸気船に乗り込むサンドル。
　デニスとニコルは縄で縛られたトヨを
連れて船に乗り込むと船が動き出す。

○大川（朝）
　蒸気船が走る。
×　×　×
　江戸堀川を蒸気船が走る。

○元貨幣司近くの波止場（朝）
　石段だけの波止場に蒸気船が着く。
　蒸気船に駆け寄る中岡、
中岡「トヨ！」
　蒸気船から西旗が下りて来る。
　サンドルとデニスとニコルがトヨを連
れて下りて来る。
西旗「近づくな。金を受け取ってからだ」
中岡「こっちだ」
　と、踵を返し歩き出す。

○元貨幣司・中
　中岡、サンドル、西旗、縄で縛られた
トヨ、デニスとニコルが入ってくる。
　千両箱が蓋を開けて積まれている。
　箱いっぱいの金貨が光っている。
中岡「ほら、ざっとこの通りだ」
　サンドルと西旗、千両箱の金貨を見る。
中岡「どうだい？　本物の金貨だろ」
サンドル「（英語）いいだろう」
中岡「早くトヨを離せ」

サンドル「（英語）放してやれ」
ニコル、トヨの縄をほどく。
トヨ、中岡に駆け寄る。
トヨ「お兄ちゃん！」
中岡、トヨを抱きしめる。
中岡「悪かった」
サンドル「（英語）金貨を運べ！」
デニスとニコル、金を運ぼうとする。
裏口の引き戸が開き、チャールズと銃を持った英国紳士十人が入ってくる。
英国紳士達、銃を構える。
チャールズ「動くな！」
サンドル達や中岡、驚く。
チャールズ「ソブリン金貨の贋金作りを追っていたら。（英語）サンドル。君が誘拐事件を起こしていたとはな」
サンドル「（英語）誤解です。彼の妹を預かっていただけです」
チャールズ「（トヨに）あなた預けられた？」
サンドル、銃を胸元から出そうとする。
トヨ「……はい。一緒にいただけです」
チャールズ、サンドルを見る。
すかさず銃を胸に収めるサンドル。
チャールズ「（中岡に）この金貨は？」
西旗「（英語）金貨はどうしたと」
サンドル「（英語）それは私の私財です」
チャールズ「お前に訊いていない。（中岡に）ここにある機械は何するもの？」
中岡「銭を作る機械です」
サンドル達、苦虫を潰した顔をする。
チャールズ「どんな銭をこれで作った？」
サンドル、銃を胸元から出そうとする。
中岡「……」
チャールズ「どんな銭？」
中岡「……」
チャールズ「言えないか？」
と、サンドルを見る。
すかさず銃を胸に収めるサンドル。
チャールズ「私が教えよう」
と、指を鳴らす。

裏口から縄で縛られた加勢がナイスに連れられ入ってくる。
中岡やトヨやサンドル達、驚く。
チャールズ「問い詰めたところ、この男はソブリン金貨の極印を作ったと白状しました。そして中岡。君に渡したと言っている」
中岡「……」
チャールズ「貴方は誰の注文でソブリン金貨を作った？」
中岡「……　そこにいる、サンドルです」
チャールズ、サンドルを見る。
西旗、サンドルに耳打ちで通弁をする。
＊以後、会話は英語。
サンドル「バカなことを言うな。この金貨は中岡に預けていただけだ。それが証拠にここにある金貨は贋金ではない。寸分の狂いなく本物だ！　調べてみればわかる」
チャールズ「……　わかった。調べてみよう。調べた結果、本物ならお咎めなし。贋金ならここにいるみんな死刑だ。いいか」
加勢やサンドル達、生唾を飲み込む。
チャールズ「調べるぞ？」
サンドル「……　どうぞ」
チャールズ「金貨を出したまえ」
サンドル、ポケットからソブリン金貨を出してチャールズに渡す。
チャールズ、その金貨を左手で持ちながら自分のズボンの右ポケットから金貨を取り出してみんなに見せる。
チャールズ「君の金貨と私の金貨は図柄が同じ。大きさとも同じ。量目を計ってみよう」
と、天秤の右の皿に自分の金貨、左の皿にサンドルの金貨を載せる。
天秤は揺れる。が、つり合いが取れる。
チャールズ「（日本語）量目も同じ。つまり、両方とも本物。千両箱の金貨を調べよう」
千両箱から右手親指と人差し指で金貨を一枚摘まみ取りみんなに見せる。
右手の他の指で別の金貨を握っているが、みんなに見えない。

チャールズ「（日本語）図柄は同じだ。量目も同じなら君達は解放だ。違ったら、贋金作りの罪で死刑だ」

一同、生唾を飲み込む。

サンドル、生唾を飲み込む。

チャールズ「君の金貨と比べよう」

と、左手で天秤の右の皿の金貨を摘まみ取り、天秤の傍に置く。

天秤は均衡が崩れ左の皿の底がつく。

チャールズ、右手で摘まんでいる金貨を天秤の右の皿に載せると見せ、すり替えて指で隠した金貨を皿に載せる。

左の皿が上がり逆に右の皿の底がつく。

一同、驚く。サンドルの金貨が軽い。

手の金貨はチャールズのポケットに。

チャールズ「贋金だ」

と、ウィンチェスター銃を手にする。

サンドル「待ってくれ。何かの間違いだ！」

チャールズ「間違いじゃない。ここにいる全員、死刑だ！」

サンドル「俺は関係ない！」

中岡「そいつだ。そいつが俺にこの贋金を作れと命令したんだ！　全部贋金だ」

サンドル、胸から銃を抜きだし、中岡に向ける。

中岡、後ずさりで、逃げようとする。

銃声がする。

中岡、腹を撃たれ血が噴き出し倒れる。

撃ったのはチャールズの銃。

トヨ、悲鳴をあげ、中岡に駆け寄る。

デニスとニコル、逃げていく。

チャールズ、銃をサンドルに向ける。

サンドル「撃つな。待て。撃つな！」

と、逃げ出す。

チャールズ、発砲。また発砲。

が、逃げた後。銃を西旗に向ける。

西旗、逃げていく。

発砲するが逃げた後。

銃を加勢に向ける。

加勢「―」

チャールズ、引き金を引く。
＊以後、会話は日本語。
チャールズ「終わったぞ」
加勢、笑顔になる。
ナイス「？」
チャールズ「ナイス。加勢さんの縄をほどけ」
ナイス「どういうことですか？」
チャールズ「後で説明する」
中岡が起き上がると泣いていたトヨが、
トヨ「お兄ちゃん！」
中岡、サラシを解くと、沢山の金貨・
潰れた弾・破れた血袋が出てくる。
中岡「鶏の血だ」
トヨ「もう」
加勢、中岡が立つのを手助けする。
ナイス「……」

○江戸堀川・波止場
蒸気船が去っていく。
見届けて、元貨幣司へ去るガウド。

○元貨幣司・中
チャールズ、天秤の右の皿の金貨を手
にとり、青い巾着に入れて加勢に渡す。
×　×　×
（フラッシュ）
極印製造室。加勢が、チャールズに青
い巾着を渡す。
×　×　×
ナイス「その巾着はあの時の」
チャールズ「そうだ。あの時、この贋金貨を
ミスター加勢から受け取ったんだ」
加勢「約束通りここの銭は全て造幣寮に持ち
帰って溶かします」
ガウドが裏口から入ってくる。
ガウド「やったな」
加勢「ガウド。サンキュ」
ガウド「チャールズ様。感謝します」
チャールズ「亡くなった益木君の弔いです。
これで彼らはイギリスに帰るでしょう」

○造幣寮・金庫室
　銭袋を荷台に載せる職工達。
加勢「千両箱のまま保管は許されなかったので銭袋で預かっていました。許して下さい。この後、千両箱に銭を移してお返ししします」
島津「しかし、サンドルは許せぬ。何も言わずエゲレスに帰るとは」

○天保山・沖
　エゲレスの軍艦が停泊している。
　その傍で数隻の和船にサンドル達の姿。
　急いで軍艦に荷揚げをしている。
加勢の声「色々ありまして」

○造幣寮・金庫室
島津「私に関係ない」
　と、部屋を出ていく。
　出ていく島津に頭を下げて見送る加勢。

○天保山沖の蒸気船・甲板（夕）
　蒸気船が夕日に向かい沖合をいく。
　甲板で大阪を見るエリーとガウド。

○天保山・波止場（夕）
　走ってきた加勢、立ち止まる。
　沖合を去る蒸気船を見る。
加勢「……」

○天保山・沖合（夕）
　ガウド、エリーにコインを渡す。
ガウド「（英語）カセからだ」
　エリー、コインを見る。
　右側にドレス着の西洋の女性の彫刻、左側に右手を伸ばしている図。
　裏返すと左側に和服姿の男の彫刻、右側に右手を伸ばす姿。
エリー「（英語）裏と表。どうして？」
　と、ガウドにコインを渡し甲板を去る。
　ガウド、赤い袱紗にコインを包み遠のく大阪の景色を一瞥して、甲板を去る。

○造幣寮・貨幣鋳造所・中央造幣室
工藤、圧印をしている。
一圓金貨がどんどんできていく。
沢山の職工が集まっている。
工藤「できた。わて等の手で。わて等の手だけで日本の銭を作ったで！」
職工達、歓声を上げる。
×　×　×
二階の監視台。井上と大隈が見ている。
力が抜けてその場に座る。
井上「これでどんどん金貨が作れる」
大隈「造幣寮をエゲレスに取られずに済む」
×　×　×
工藤、手の中の金貨を見つめる。
×　×　×
（フラッシュ）
デニスが圧印機の調整をする姿。
×　×　×
工藤「ここまでできたのもエゲレス人の教えがあったからや。みんなエゲレスに向こうて黙礼すんで」
一同、西を向く。
工藤「礼！」
一同、黙礼をする。
×　×　×
監視台。井上と大隈が座って涙を流す。

○同・同・極印製造室
加勢達、黙礼している。

○同・同・中央鋳造室
工藤「礼止め！」
みんな、礼を止める。
平沼「この際、髷を落とすか。これ以上、髷にこだわることないやろう」
職工達、笑いながら「落とすか」と言い合う。

○同・外観（夕）
夕日に染まる造幣寮。

○大英博物館・館長室
館長と話すガウド。
＊以後、会話は英語。
ガウド「国家予算に匹敵する日本政府の借金も残り僅かになりました。日本は英国の属国にならずにすむでしょう。今後、我が国は日本を対等な国として友好関係を築いていく必要があります」
館長「この貨幣にそんな意味があるんだね」
ガウド「えぇ」
館長、赤い袱紗からコインを取り出す。
館長「このコインは何だね？」
と、ガウドに向けて弾いて飛ばす。
回転するコイン。片面にドレス着の女、もう片面に和服姿の男の彫刻。
コインがガウドの手に収まる。
ガウド「そういうことか。失礼します」
と、踵を返して部屋を出る。

○煉瓦作りの英国屋敷
庭に花壇がある立派な屋敷。
ガウドが家の中に入っていく。

○同・寝室
エリー、パッチワークをしている。
ガウドが入ってくる。
＊以後、会話は英語。
エリー「お兄様」
ガウド「エリー。大切なものを返しにきた」
エリー「何を？」
ガウド、コインをエリーに渡す。
エリー、コインを見る。自分の姿。
裏面には加勢の姿。
エリー「要らないと言ったはずよ」
ガウド「よく見ろ」
と、コインをテーブルの上で回転させる。加勢とエリーがダンスをしているように見える。

○（回想）造幣寮・泉布観・二階（夜）

バルコニーからエリーが入ってくる。
右手に包帯をした加勢が入ってくる。
エリー、加勢に駆け寄る。
加勢の肩に手をかける。
加勢とエリーが社交ダンスを始める。
エリー、楽しそうに踊る。
加勢、ぎこちない踊り。
エリー、加勢の手を引っ張る。
エリー、加勢を振り回して踊る。
加勢、必死についていく。
エリー、部屋の中央で一人舞う。
加勢、エリーに見とれる。
エリー、急に加勢の胸に飛び込む。
エリー、加勢の手を取りリードする。
加勢、笑顔になって楽しそうに踊る。
加勢とエリー、部屋の中央で舞う。

○元の英国屋敷
エリー、立ち上がる。
＊以後、会話は英語。
エリー「私、日本に行く！」
と、箪笥を開け、荷造りを始める。
泥酔した英国人婚約者が入ってくる。
婚約者「何をしている？」
エリー「あなたとの婚約は破棄よ」
と、バックを持って出ていく。
婚約者「……」
ガウド「……」

○造幣寮・極印製造室
T―『二か月後』
加勢、鏨と益木とはるの位牌を一緒に風呂敷に包む。
俵と職工が立っている。
俵「先生、辞めんといて下さい」
加勢「必要なことは全部教えた。頼んだぞ」
俵「そやかて」
加勢「約束だ」
俵「約束？」
加勢「領事とな。ソブリン金貨の極印を作っ

ただろ。今後、極印作りをしない約束をかわしたんだ。よろしく」
と、風呂敷を掲げて立つ。
部屋を出ていく。

○同・同・中央鋳造室
極印製造室から加勢が出て来る。
誰もいない。機械が並んでいる。
加勢、機械を一瞥して、歩き去る。

○同・鎮台・表
貨幣鋳造所の中央入口から加勢が風呂敷を担いで出て来る。
鎮台の門を出ると中岡がいる。
加勢と中岡、並んで歩く。
造幣寮と大川の間の道を南向きに歩く。
久世とトヨが走って出て来る。
遠のく加勢と中岡の後ろ姿。
久世「一緒に行かんでよいか」
トヨ「行きまへん。もう懲り懲りだす」
×　×　×
大川を北上してくる蒸気船。
エリーが甲板に立っている。
×　×　×
南に向かって歩く加勢と中岡。
その先に北上する蒸気船と大阪の街。

―終わり―